

東洋美術大觀十三

Blank Page Digitally Inserted

東洋美術大観十三

東洋美術大觀第十三冊

彫刻之部

目次

緒言	一
三代銅器の鑄飾	一
三代玉器の琢飾	一
漢代の石彫及瓦甃	二
漢代の金玉諸品	二
三國兩晋の古鏡	三
元魏の佛像	四
元魏の道像	十一
碑碣の彫飾	十二
第一圖 角鴞尊	
第二圖 犧尊	
第三圖 器飾銅犧首	
第四圖 同銅犧首	
第五圖 同銅螭首	
第六圖 同銅虎首	
第七圖 躬象圭	
第八圖 瑞玉璫	

第十九圖 漢祠堂壁石浮彫畫象	
第二十圖 同	
第二十一圖 同	
第二十二圖 同	
第二十三圖 同	
第二十四圖 同	
第二十五圖 同	
第二十六圖 同	
第二十七圖 同	
第二十八圖 同	
第二十九圖 同	
第三十圖 同	
第三十一圖 同	
第三十二圖 同	
第三十三圖 同	
第三十四圖 同	
第三十五圖 同	
第三十六圖 同	
第三十七圖 同	
第三十八圖 同	
第三十九圖 同	
第四十圖 同	
第四十一圖 同	
第四十二圖 同	
第四十三圖 同	
第四十四圖 同	
第四十五圖 同	
第四十六圖 同	
第四十七圖 同	
第四十八圖 同	
第四十九圖 同	
第五十圖 同	
第五十一圖 同	
第五十二圖 同	
第五十三圖 同	
第五十四圖 同	
第五十五圖 同	
第五十六圖 同	
第五十七圖 同	
第五十八圖 同	
第五十九圖 同	
第六十圖 同	
第六十一圖 同	
第六十二圖 同	
第六十三圖 同	
第六十四圖 同	
第六十五圖 同	
第六十六圖 同	
第六十七圖 同	
第六十八圖 同	
第六十九圖 同	
第七十圖 同	
第七十一圖 同	
第七十二圖 同	
第七十三圖 同	
第七十四圖 同	
第七十五圖 同	
第七十六圖 同	
第七十七圖 同	
第七十八圖 同	
第七十九圖 同	
第八十圖 同	
第八十一圖 同	
第八十二圖 同	
第八十三圖 同	
第八十四圖 同	
第八十五圖 同	
第八十六圖 同	
第八十七圖 同	
第八十八圖 同	
第八十九圖 同	
第九十圖 同	
第九十一圖 同	
第九十二圖 同	
第九十三圖 同	
第九十四圖 同	
第九十五圖 同	
第九十六圖 同	
第九十七圖 同	
第九十八圖 同	
第九十九圖 同	
第一百圖 同	
第一百零一圖 同	
第一百零二圖 同	
第一百零三圖 同	
第一百零四圖 同	
第一百零五圖 同	
第一百零六圖 同	
第一百零七圖 同	
第一百零八圖 同	
第一百零九圖 同	
第一百一十圖 同	
第一百一十一圖 同	
第一百一十二圖 同	
第一百一十三圖 同	
第一百一十四圖 同	
第一百一十五圖 同	
第一百一十六圖 同	
第一百一十七圖 同	
第一百一十八圖 同	
第一百一十九圖 同	
第一百二十圖 同	
第一百二十一圖 同	
第一百二十二圖 同	
第一百二十三圖 同	
第一百二十四圖 同	
第一百二十五圖 同	
第一百二十六圖 同	
第一百二十七圖 同	
第一百二十八圖 同	
第一百二十九圖 同	
第一百三十圖 同	
第一百三十一圖 同	
第一百三十二圖 同	
第一百三十三圖 同	
第一百三十四圖 同	
第一百三十五圖 同	
第一百三十六圖 同	
第一百三十七圖 同	
第一百三十八圖 同	
第一百三十九圖 同	
第一百四十圖 同	
第一百四十一圖 同	
第一百四十二圖 同	
第一百四十三圖 同	
第一百四十四圖 同	
第一百四十五圖 同	
第一百四十六圖 同	
第一百四十七圖 同	
第一百四十八圖 同	
第一百四十九圖 同	
第一百五十圖 同	
第一百五十一圖 同	
第一百五十二圖 同	
第一百五十三圖 同	
第一百五十四圖 同	
第一百五十五圖 同	
第一百五十六圖 同	
第一百五十七圖 同	
第一百五十八圖 同	
第一百五十九圖 同	
第一百六十圖 同	
第一百六十一圖 同	
第一百六十二圖 同	
第一百六十三圖 同	
第一百六十四圖 同	
第一百六十五圖 同	
第一百六十六圖 同	
第一百六十七圖 同	
第一百六十八圖 同	
第一百六十九圖 同	
第一百七十圖 同	
第一百七十一圖 同	
第一百七十二圖 同	
第一百七十三圖 同	
第一百七十四圖 同	
第一百七十五圖 同	
第一百七十六圖 同	
第一百七十七圖 同	
第一百七十八圖 同	
第一百七十九圖 同	
第一百八十圖 同	
第一百八十一圖 同	
第一百八十二圖 同	
第一百八十三圖 同	
第一百八十四圖 同	
第一百八十五圖 同	
第一百八十六圖 同	
第一百八十七圖 同	
第一百八十八圖 同	
第一百八十九圖 同	
第一百九十圖 同	
第一百九十一圖 同	
第一百九十二圖 同	
第一百九十三圖 同	
第一百九十四圖 同	
第一百九十五圖 同	
第一百九十六圖 同	
第一百九十七圖 同	
第一百九十八圖 同	
第一百九十九圖 同	
第二百圖 同	

第二十五圖	神人怪獸鏡	第四十五圖	同
第二十六圖	苻秦太初四年鏡	第四十六圖	同
第二十七圖	盂氏作鏡	第四十七圖	同
第二十八圖	張氏作鏡	第四十八圖	同
第二十九圖	大同雲岡石佛寺窟龕	第四十九圖	同
第三十圖	東洞大佛像	第五十圖	同
第三十一圖	東洞右挾侍菩薩像	第五十一圖	同
第三十二圖	西洞佛像	第五十二圖	同
第三十三圖	第二洞下層左壁	第五十三圖	同
第三十四圖	第二洞下層右壁	第五十四圖	同
第三十五圖	第六洞	第五十五圖	同
第三十六圖	第二洞上層正面本尊	第五十六圖	彌勒白玉石像
第三十七圖	第二洞上層	第五十七圖	龍門賓陽北洞本尊佛像
第三十八圖	第十二洞	第五十八圖	同
第三十九圖	魏太和六年造釋迦金銅像	第五十九圖	同
第四十圖	魏太和九年造金銅佛像	第六十圖	龍門賓陽中洞當陽本尊佛及挾侍聲聞像
第四十一圖	龍門古陽洞北壁最東部	第六十一圖	同
第四十二圖	北壁東部	第六十二圖	同
第四十三圖	北壁西部	第六十三圖	同
第四十四圖	北壁	第六十四圖	同
			皇后供養圖浮彫
			皇帝供養圖浮彫
			南面佛菩薩像
			北面佛菩薩像
			右挾侍菩薩像
			左挾侍菩薩像
			南壁東部
			南壁
			北壁下部
			北壁
			北壁下部

第六十五圖	龍門賓陽南洞本尊佛及挾侍聲聞像
第六十六圖	同 北壁
第六十七圖	龍門蓮花洞
第六十八圖	同 挾侍聲聞像
第六十九圖	同 挾侍菩薩像
第七十圖	同 南壁龕
第七十一圖	同 南壁
第七十二圖	二佛並坐白玉石像
第七十三圖	白玉石兩面像表面
第七十四圖	同 背面
第七十五圖	彌勒玉石像
第七十六圖	東魏天平四年造佛石像
第七十七圖	沙彌法盛造白玉石兩面像表面
第七十八圖	同 背面
第七十九圖	石佛像
第八十圖	黃玉石佛像
第八十一圖	菩薩石像
第八十二圖	同
第八十三圖	彌勒白玉石像
第八十四圖	黃玉石佛像

第八十五圖	黃玉石佛像
第八十六圖	三尊白玉石像
第八十七圖	黃玉石四面像
第八十八圖	白玉石二級浮圖
第八十九圖	魏太和十六年比丘慧教造銅像
第九十圖	魏太和二十一年鄭儀皂造多寶銅像表面
第九十一圖	同 背面
第九十二圖	魏神龜二年林師德造彌勒銅像
第九十三圖	魏正光三年金德造釋迦銅像
第九十四圖	菩薩金銅像
第九十五圖	魏永平年造天尊石像
第九十六圖	魏正光二年造天尊石像
第九十七圖	天尊四面像其一
第九十八圖	同 (其二)
第九十九圖	白馬寺出土碑像首

東洋美術大觀

支那彫刻之部

緒言

支那古代の彫塑美術は、三代に在りては銅器、玉器、兩漢に在りては享堂碑闕の畫象、六朝乃至李唐に在りては佛教像、道教像及陵墓の儀衛表飾の類を以て主なるものとす。その餘廟祠の神像竝に宮館苑池の莊飾及山川鎮壓の人獸等に、金石木土の彫像ありき。雖も、文獻の徵すべきのみにて、遺物の觀るべきもの稀なるを以て、これを詳論すること難し。

三代銅器の鑄飾

銅器の鑄造は、黃帝軒轅氏が寶鼎を荆山の下に鑄て、上帝鬼神の祭祀に用ゐきと云ふを以て、最も古き史徵とす。夏の禹王に至りて始めて鼎飾に圖象あり。山川奇怪、鬼神百物を鑄出して、以て神物の畏敬すべきを示す。商に至りては銅器今に存ず。その莊飾に著けたる饗饗等の鼻目隆起して、浮彫の原始と見らるべく、匱の蓋は夔龍の頭に作り、以て後に器物の全體鳥獸の形を爲すもの、出て來る端を啓けり。周に至りては鑄器大いに發達し、虞夏殷商の世に在りて瓦器、木器たりしものまでも、皆銅器と爲り、六彝、六尊の屬、その形象彫塑として見るべきもの少からず。六彝の中に、雞彝、鳥彝は共に器の全形を雞鳥の象に作れる遺品あり。住友家所藏の角鴟尊^{第一の如きは即ちこれなり}、その鳥形高雅にして、最も三代彫塑の技術を觀るに宜し。虎彝、蜼彝も器形を獸象に作れるならむ。住友家所藏の乳虎卣は、蓋し周代虎彝の一異制なるべし。六尊の中、彫塑として見るべきは犧尊、象尊の二器なり。器物の全體を牛象の形に作り、背を穿ちて酒を盛るべからしめたり。今その一例として一犧尊^{第二を掲ぐ}、金錯^{金葉}にして眼に紅寶石を嵌せり。周漢の遺品とす。又馬匱、犧匱等、牛馬の形を爲せる古器あり。罍の鈕には好みて虎形を著けたり。その餘、銅器の蓋鈕、鑿耳、提梁、器足等に鳥獸の形を著けたるもの、周漢の遺品に多し。今掲ぐる所の器飾^{第三、第四圖は犧尊、第五圖は象尊、共に車末飾ならむ。第六圖は虎首、第七圖は象首、共に}としてこれを用ゐしことは、竝に經傳に著れたり。鑄飾の技術大いに發達せしも亦偶爾ならず。

三代玉器の琢飾

フリヤ氏

進
望

Blank Page Digitally Inserted

虞舜五瑞を輯めて諸牧に班ち、五禮を修めて五器を贄せしより、草昧の時代に於ける石製の武器既に變じて禮器と爲り、石斧の圭に化し、圓板様の石兵の璧に化せるを見る。周禮に至りて、六瑞六器の制甚だ精し。圭璧琮璋琥璜の類皆彫飾あり。以て爵位禮度を序す。春秋の世、益玉器を重用し、その故事又頻りに經傳に見えたり。されば雕玉の技術も頗る發達し、宋人の玉楮葉の如きは後世工巧の典故たり。惜むらくはその遺品銅器の如く多からず。今僅に躬圭第七圖躬圭は六瑞の一にして侯これを持つ。及琮第八圖琮は卑に兩を出して、古玉瑒飾の技巧を示すを得るに過ぎざるなり。

漢代の石彫及瓦甃

周代既に仲山甫の冢に石羊虎あり。吳の闔閭の墓に石虎あり。越の文種祠堂又食堂とも云ふ。の墓に石柱石鶴あり。秦に至りて驪山の陵に石麒麟あり。漢に至りて陵墓の儀衛表飾益盛なることを致し、終に墓上に享堂祠堂又食堂とも云ふ。を建て、その壁石に種々の畫象を彫刻すること興り、石闕石碑亦彫飾を加ふるに至り、後漢に至りてその盛を極む。享堂及石闕畫象の最も著名なるを孝堂山祠及武氏祠とす。竝に山東に在り。武氏祠石闕の畫象は石工孟孚、李丁卯二人の作に係り、闕前の石獅は彫刻家孫宗の手に成り、祠堂の中にて武榮祠の壁石畫象は、良匠衛改の作る所なり。遺品と共に作者の名を傳へたるは漢代稀有の事とす。その餘漢代畫象石の今に存在するもの甚だ多くして、殆ど枚舉に遑あらず。我が國に在りてこれを觀むと欲すれば、多くは拓本に依るの外なし。今原石の寫眞を以て示すことを得るもの二三を掲げて、以て漢代畫象石彫刻の技風を觀るに便す。劉鐵雲舊藏石第九圖李是、武氏祠石と彫法、畫趣全く相同じくして、車馬を三段を彫出せり。題榜あり。雖も刻字なきが故に、その故事知るべからず。帝室博物館藏石。第十は、元山東嘉祥縣中關廟に在りしものにて、濟南中學明倫堂所藏庚石と連るべき左半なり。彫法前者と異なりて、畫象外の地を削下するに平鑿を用ゐ、宴饗樂舞庖厨の狀を圖せり。内堀氏藏石其十一圖。は濟南附近の出土にして、彫法更に前二石と異なり、象外の地は鑿痕を以て石面を粗にせり。その一は上に王者の正坐せる左右に物を持ちて拜跪せる人あり。左方の後なるは鳥首人身なり。蓋し殷の湯王の德禽獸に及べる故事ならむ。その下に周の周公が成王を輔尊する圖あり。下層は車騎及步導を圖せり。その二は上層管絃唱歌、中層飲宴、搥鼓及倒立の戲、下層は調食の狀を圖せり。これ等の數石、以て漢代畫象石彫刻の一斑を鑒賞するに足る。

瓦甃の類も漢に至りて往々遺品を今に傳ふ。甘泉宮瓦、白鹿觀瓦並に石甃に出づ。等の外、往々四神の瓦當あり。今その一種第十三圖至第十六圖。を掲ぐ。畫象石に比して頗る技巧の精しきを認む。四神は漢代頗る行はれたる裝飾の題材なりき。

漢代の金玉諸品

三代の物よりは稍新しき玉器の遺品、稱して漢玉と云ふもの、往々傳存せり。製作の年代果して劉漢に在りや否や、これを明確ならしむるここ頗る難し。今た、一二の古玉を掲げてその例を示す。雙螭佩^{第七圖}及夔龍瑗^{第八圖}の如し。銅器にして漢の創制に係るものは虎符あり。文帝始めてこれを爲りて以て周の牙璋に代ふ。銅もて虎形を作りて左右二分とし、その内面に兩分相反する凹凸を作りて合ふべからしめ。金錯又は銀錯もて外側に郡國軍名を書す。右を京師に留め、左を郡國の守相に與へ、以て兵を發するに用ゐる。遺品傳世少からず、ここに掲ぐるは新莽の右領軍虎符^{第九圖}なり。彝尊の類又漢器と思はる、遺品多し。その器形は周制に倣ふ。雖も、鑄飾の作風稍異なるを認む、ここに掲ぐる祖卣^{第十圖}の如きは、獸角の隆起甚しく、その尖端器體を離れて斗出せり。百獸壺^{第十一圖}の如きは、浮彫の鳥獸曾て三代の遺器に見ざる所。蓋し共に漢器なるべし。武帝の世よりして尙方の作工漸く進む。元帝、成帝の世、西蜀の廣漢郡にも亦工官を置き、京師の考工室と共に巧を造器に極む。當時の遺品雁足鐙、羊鐙、蚊鐙、博山鑪、獸鑪の類、作者の名のその刻銘に知らるゝもの少からず。鑄飾又頗る見るべし。これを前漢工藝の最盛時とす。長安の巧工丁緩及木彫家李菊の如きは、偶、その名を史傳に留めたる者なり。後漢に至りて蔡倫、張衡亦機巧を以て稱せらる。靈帝、獻帝の世に至りて鏡背の鑄飾始めて觀るべし。後漢末の古鏡、銘に年月あるものありて、以てこれを徵するに足る。ここに掲ぐる建安十年鏡^{第二十圖}の如きは即ちこれなり。尙方作鏡^{第二十一圖}は年號なし。雖も亦漢鏡なるべし。竝に以て漢代鑄飾の技風を觀るに足る。

三國、兩晉の古鏡

三國の時、魏に名巧馬鈞あり。吳に工人潘芳あり。馬鈞は木彫を以てし、潘芳は金工を以てし、竝に名を天下に馳す。三國の工藝後漢に譲らざるも亦宜なり。されば太平、永安、元興の年號ある古鏡を見るに、神人怪獸を鑄出して、漢の建安鏡よりは技巧較、進歩せり。晉に至りて泰始、太康、元康、永康、咸康等の年號ある古鏡の遺品を今に傳ふ。^{第二十三圖}は泰始元年鏡。^{第二十四圖}は咸康三年鏡。鑄飾の術益、精妙を加へたり。後趙の石季龍豪華を好み、雜伎工匠を置きて技巧を窮極す。こゝを以て石趙の建武鏡は工藝の精美を極め、その工緻漢晉諸鏡の遙に及ぶ能はざる所たり。こゝに掲ぐる神人怪獸鏡^{第二十五圖}は極めて建武鏡に似たれば、惟ふに亦鄴都の製なるべし。苻秦、北燕の製亦晉に遜らず。太初、太平の諸鏡以てこれを觀るべし。^{第二十六圖}は苻秦太初四年鏡。^{第二十七圖}は年號なし。雖も、亦漢晉の製たること疑なし。張氏作鏡^{第二十八圖}は樣式稍新しければ、或は東晉以後の製か。この餘漢晉の古鏡は遺品甚だ多し。雖も、今彫塑としての技巧觀るべきものゝみを收む。この種の晉鏡、從來の支那金石諸書皆漢鏡と爲しつれど、近年年號鏡の發見せられしより、始めて鑒定の誤れることを知るに至れり。

元魏の佛像

佛教は後漢の世に支那に傳はりけれど、佛像（第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）は東晉、石趙、苻秦、元魏に至りて、その製作始めて大に行はる。南朝は東晉より劉宋にかけて戴安道父子出で、佛像の典型始めて見るべし。爾來蕭齊、蕭梁を経て陳に至るまで、歷代造像頗る盛なりしかど、その遺品極めて稀なるを以て、南方の像式はこれを詳論すること難し。これその作の銅像、木像、夾紵漆像及塑像を主とし、銅像は後屢滅法の厄に遇ひて銷毀せられ、木土、夾紵の諸像は傳世久しきことを得ざるが爲なり。これに反して北方には銅木塑漆の外、石像最も盛に製作せられ、殊に自然の山巖を鑿して洞窟摩崖の像を作れるもの多く、滅法の時にもこれを毀つこと容易ならず。且石像はこれを毀つも銷して以て錢を鑄ること能はざるが故に、おのづから厄を免れて後に傳はれるもの多し。こゝを以て北方の造像獨り今に存じ、以て元魏、高齊の佛像をして、六朝彫刻史の主體たらしめたり。仍りて今先北方洞窟の遺像を敘すべし。

抑、支那佛洞の起原は苻秦の世に在り、建元元年沙門樂僊燉煌に至り、鳴沙山の崖に就いて一洞を穿ち、中に佛像を造る。これを莫高窟と云ふ。次いで法良禪師又こゝに至り、尊師の窟側に於いて更に營建する所あり。又刺史建平公、東陽王等ありて次第に造作す。爾後道俗の鑿窟造像甚だ多く、初唐の頃に至りて洞窟一千餘あるに至る。謂はゆる千佛巖これなり。これに次ぐを北涼の沮渠蒙遜が鳴沙山の東なる三危山の崖に造れる像窟とす。

既にして元魏太武帝の滅法の反動として、文成帝の佛法を復興せる時、沙門曇曜大いに窟龕を北代に造る。代は即ち今の大同府大同縣にして、即ち當年の魏都恒安なり。曇曜帝に請ひ、都城の西北三十里武州山の北面に於いて、石壁を鑿して石窟五所を開き、名づけて靈巖と云ふ。龕の大なるもの舉高二十餘丈、三千人を容るべし。各龕面別に各佛像を彫出す。高きものは七十尺、次なるものは六十尺。巧麗を窮極して龕ごとに狀を同うせず。彫飾奇偉一世に冠たり。これを支那内地に於ける窟龕大造像の嚆矢とす。大安元年より和平三年に至りて正に成る。その後又道俗の窟を鑿し、像を彫するもの相尋いで絶えず。今の大同の石佛寺乃至その附近に櫛比せる龕像は即ちこれなり。（第二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）今靈巖石像の最も古しと思はるゝ大作の様式を觀るに、宛も唐の道宣律師の言へるが如く、唇厚く目長く、頤豐にして、挺然たる丈夫の相を爲せり。その崇高雄偉の趣は、後代の藝術復これに如くものなしと謂ふも過褒に非ず。殊に石佛寺東洞の大佛（第三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）及その挾侍（第三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）並に寺の西方なる一洞の大佛（第三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）の如きは、一種の特徴ある面貌姿態、印度風にも非ず、又漢人の理想に出でしものとも見えず。第二洞下層（第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）及第六洞（第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）の諸像も、後世の補彩に依りて頗る原相を失ひ、相貌較、穩雅なれど、魏末、高齊の諸像の如く柔相ならずして、尙舊時の面影を存せり。その第二洞上層（第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）第十二洞（第三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百）の諸像概して亦然り。衣褶の彫法に於いて最も見易き特徴は、外崖の大佛

第三十圖に見るが如き領邊の折線を爲せるに在り。この風は後出の龍門古陽洞諸像中太和、景明間の所作に傳はれり。雖も、魏末に至りては復これを見ず、佛頂の形は肉髻過大にして峩冠の如く、印度の佛像に類例あるを見ず。坐法は結跏、交脚、並脚の三種あり。結跏は印度及後代の像と大差なく、並脚は印度の倚像に類せれど、交脚坐は全く印度の薩埵跏又は輪王坐とも異なり。倚像の兩脚を交叉せしめたるものに、魏末、高齊以後再びこれあるを見ず。これ惟ふに拓跋氏の風俗より出でたるならむ。手相は說法手及合掌手の間、印度及後世の諸像と同じきあるのみ。餘は未だ印相の定名を以て呼ぶべきものあらず。定印は則ちこれあり。雖も、兩手を上下に重ねずして前後に重ねたり。こも亦靈巖の佛像の印度の藍本より出でたるに非ざることを證するに足る。この手相も魏末以後亦絶えて見ることをなし。竝に靈巖像式の特徴とす。惟ふにこの印度風にも非ず、漢人の面貌姿態にも非じ。見ゆる所のものは、即ちこれ拓跋族理想上の大丈夫相に非ずして何ぞや。拓跋氏は鮮卑の支族にして、早く北陲の烏洛侯國に據り、かゝる體格とかゝる面相とに相應せる圖南の雄志を以てしたればこそ、塞内に入りて魏國を北代に建て、以て中原を掃蕩せるなれ。その元氣滂湃して以てこの靈巖の美術を成す。誠に偶爾ならざるなり。吾人は曾て元魏像式の由りて來る所を考へ、初めこれを印度の古像に求めて毫も相似の徵を得ず。仍りて望みを中央亞細亞の發掘品に屬し、縱令龜茲、于闐の物は健馱羅の作に似たらむとも、燉煌及高昌の故地等よりは、必ずや健馱羅式と元魏式との聯絡を尋ねべき物の出で來むことを想ひ居りしに、さはなくて、近年スタイン及西本願寺等の發掘品、皆主として唐土文化の西流を示すものゝみ。終に支那像式西來の關紐を發見すること能はず。こゝに於いて始めて元魏式の全く拓跋族の理想に出でしものなりとの見解を下すに至りぬ。たゞ石窟鑿造の事は、これより先印度に行はれ、アジャンタには西曆一二世紀の窟寺もあれば、惟ふにこれに仿ひしものなるべく、さればこそ苻秦、北凉、拓跋氏等の胡人に依り、鳴沙、三危の西陲に始まりて、漸く代都に及びしなれ。これに由りて更に考ふるに、南北朝の際、五胡の塞内に入りて國を建てしは、固より漢土の平和を攪亂して生民を塗炭の苦に陥れしこと甚しかりき。雖も、文化は爲に外來の分子を交へて、大いに流動變化を起し、樂舞に種々の新聲、新様を加へ、胡器、胡服に生活の形式を發展せしめ、彫塑の美術に元魏式を生ずるに至りしなり。されど漢人の文物と勢力とは由來偉大なり。五胡の強、武力に於いて一時能くこれに勝てり。雖も、幾くもなして盡く同化し去らる。孝文帝太和の末、都を洛陽に遷し、拓跋の姓を元氏と改むるに至りては、既に往時の強胡に非ず。故を以て靈巖の拓跋像式は久しくその特色を保持すること能はずして、直ちに浸染變化の運動を起し、以て我が國に流傳して謂はゆる推古朝式と稱せらるゝ所のものと爲る。これ即ち靈巖の拓跋式及龍門の太和、景明頃の作風より出で、變化せる魏末、高齊の様式なり。されば靈巖の諸像中にも、後年の所造に係るものは、當初の物と趣致を殊にするもの亦少からず。

かくて靈巖の龕像一たび成りしより、太和に至りて造像急に天下に盛なり。その金石の諸像遺品少からず。今太和六年及九年所造の釋迦

金銅像 第三十九圖は太和六年造。第四十圖は同九年所造。 二軀を掲げて以て鑒賞に資す。衣褶の彫法、二軀共に靈巖の大佛に同じく、面貌、化佛、光背等の様式亦互に酷似せり。前者殊に技巧の精妙を認む。光背の背面には佛の誕生、浴佛、成道諸天歡喜供養及二佛並坐の圖を鑄出し、浮彫の術亦頗る巧なり。跌上に師子を著く。即ち太和、景明頃の流行なり。

大同の靈巖に次いで、元魏美術の最も巨壯なる大興造の遺蹟を龍門龕とす。龍門山は古の洛陽即ち今の河南府の南三十里、伊水の西岸に在り。石壁を鑿して窟龕を造る。元魏よりして下唐代に至るまでの造像無數にして、實に支那古代石彫の淵藪たり。その中最も古きを古陽洞とす。即ち魏世の謂はゆる石窟寺なり。洞内坐佛三尊像の外、四壁滿面に龕を造り、像を刻して、尺寸の餘地なし。その像題銘あるもの多し。これに由りて古陽洞鑿造の年代及鑿造者を考ふることを得。即ちこの洞は魏都の北代より洛陽に遷れる翌年即ち太和十九年末には既に成りて、洞壁に道俗の像龕を造る者あるに至りしなり。こは太和十九年十一月の長樂王夫人造像の銘あるにて徴せらる。而してこの洞の鑿造者は孝文帝の再從兄弟たる比丘慧成なること、太和廿二年の始平公像の題銘に依りてこれを知るべし。始平公は慧成の父にして、景穆帝の子汝陰王天賜の第五子元修義なり。慧成は皇恩に答へ、來業に資する所あらむが爲に、この石窟を造りしが、久しからずしてその父薨じたるを以て、更に壁上に佛像一龕を造りて父の冥福を修せしなり。又慧成をして能くこの大業を成さしめたるは孝文帝なること、安成縣開國子楊大眼の造像銘に依りて考へらる。大眼は太和二十一年帝に従ひて南征し、事果て、京に歸る時、途にこの石窟に過りしにその時帝既に崩ぜられしかば、先皇の明蹤、盛聖の麗迹たるこの洞に詣て、泣然流感し、終に帝の爲に石像一軀を洞壁に造りぬ。これ景明初年の事なり。北海王元詳、同太妃高氏、廣川王太妃侯氏、都綰關口遊激校尉司馬解伯達等亦各像を造り、比丘法生も北海王母子の爲に亦復像を造れり。竝に太和、景明間の事とす。爾來洞壁の造像唐代に至るまで相尋いで絶えず。故にこの洞のみにても、殆ど魏齊隋唐彫像の變遷を稽ふることを得べし。 第四十一圖より第五十五圖に至る。今先この洞の龕像に就いて太和、景明頃の像式を觀るに、楊大眼 第四十圖 及新城縣功曹孫秋生 景明三年、第五十五圖、比丘法生 景明四年、第五十五圖、陸渾縣功曹魏靈藏 第四十圖 所造の五像は皆如來像にして、姿形の大體及結跏坐、定印の相より、領邊折線形の衣褶乃至皺襞の彫法に至るまで、凡べて先の靈巖の像式より出で、特徴多少薄れたるに過ぎず。雖も、面貌は頗る柔和と爲れり。これ即ち拓跋の漸く漢人化せる變遷に外ならず、惠感の造像 第二十圖 は彌勒菩薩にして、交脚坐の姿態及板を重ねたる如き衣褶の起伏、竝に曲線の平行せる一種の形式、亦靈巖に酷似せり。この様式に屬する彌勒像は古陽洞中最も多し。北壁東部の數龕 第四十二圖左方下部の一大龕、及その左の二小龕第一、第四十六圖、第四十七圖、第五十三圖等。 及魏靈藏像下の一龕 第四十四圖、第四十五圖、等即ちこれなり。惟ふに皆太和、景明間の所造に係る。これを龍門初期の像式とす。これ等に次いで正始二年蕩寇將軍王史平の所造 第三十圖、永平二年比丘尼法文、法隆等の所造 第一圖、第四十圖、同三年比丘尼法慶所造 第一圖、第四十圖 の彌勒像は、その様式尙太和、景明の作と略相同じけれど、永平四年比丘尼道略の所造 第三十圖、及安定王所造 第二圖、第四十圖 の彌勒像に至りては、衣褶頗る流暢と爲り、裾端の曲折

較、婉巧を加へたり。同年殿中將軍曹達所造の釋迦第四十圖。同三年比丘尼法行所造の定光如來第四十圖。同四年比丘尼法興所造の彌勒像第四十四圖。及延昌元年劉洛眞の彌勒像二軀第四十圖に至りては、衣褶益々婉巧にして、姿態愈々妥貼なり。これ即ち世宗代の像式にして、漸く東西魏代の風に移り行く過程に外ならず。像の跏趺座に造像者の禮拜供養する像を彫出することは、早くよりこれありしが、安定王の造像に至りては、師僧に伴はれ、繖蓋を翳させ、行列して佛に詣づる様、元魏の世盛に行はれたりし行像の盛儀をも想像するに足るものあり。佛菩薩像の髮容、寶冠、胸下交絡の巾帶、龕緣及天蓋の帷幕裝飾よりして、龕形、師子、香爐等に至るまで、子細に觀來れば、皆各年代の特徴あり。鑒賞盡くる所を知らず。降りて肅宗代に至りては、作風更に變化せり。熙平二年齊郡王祐の彌勒像第四十圖は、交脚坐の舊式を存すれど、神龜三年比丘惠感等の彌勒像第五十四圖、正光二年比丘慧榮の釋迦像第四十八圖。同四年比丘法降の釋迦像第四十七圖。及黑瓮生の佛像二軀第四十八圖等に至りては、皆結跏趺坐の像にして、座前の垂衣曲折翻覆重疊して、長く座を掩ひ、新に一種の新様式を産出せり。これ即ち我が國の推古朝式の由りて來る所の本にして、法隆寺金堂釋迦像の衣褶は即ちこの式に屬せり。この作風の像は、尙北壁の數龕第四十二圖及南壁の一龕第五十四圖等あり。この式と前の世宗末の式との過渡を示すものは、南壁の一龕第五十四圖に見るが如し。又神龜二年杜□安所造の二佛並坐像第五十四圖の如きは、垂衣翻覆重疊せずして、直垂せる下端を曲折せり。この式に屬するもの亦少からず。古陽洞名下の二龕第四十三圖の如し。これ皆靈巖以來世宗代に至るまで行はれし交脚坐式の衣褶より生じ來れる變化に外ならず。

洞窟摩崖の像に非ざる石彫の佛像にして、太和乃至北魏末の所造に係る遺品少からず。本書收むる所の白玉石彌勒像第五十六圖は、西安鄠縣草堂寺の舊藏と聞く。その様式全く古陽洞世宗代の像に同じく、交脚坐の形式改まりて半跏坐と爲れるに過ぎず。草堂寺は姚秦の鳩摩羅什譯經の舊蹟にして、太和二十一年五月、孝文帝詔して塔を建てし寺なれば、この像蓋し建塔を去ること遠からざる頃の製作なるべし。

正光四年龍門の賓陽洞成る。北中南の三洞あり。龍門諸洞中最も壯大にして北端に在り。今の潛溪寺の石窟これなり。景明の初め、宣武帝闢官大長秋卿白整に詔し、代京の靈巖石窟に準らへ、洛南伊闕山に於いて、高祖文昭皇太后の追福の爲に、石窟二所を營ましむ。開鑿の初め、窟頂地を去ること三百一十尺なりき。正始元年帝行幸あり。同二年中に至りて山を斬ること二十三丈。既にして闢官大長秋卿王質代りて工を董す。念へらく、山を斬ること太だ高く、費功就り難しと、仍りて奏して下に移し、地を去ること一百尺、南北一百四十尺とす。永平中に至り、闢官中尹劉騰奏して、帝の爲に復石窟一所を造る。孝明帝熙平二年四月、胡太后伊闕石窟寺に幸し、竝に即日宮に還りしは、蓋しこの石窟の工事を觀むが爲なりしならむか。かくて景明元年より正光四年六月に至り、二十四載にして方に成る。功を用ゐること實に八十萬二千三百六十六と云ふ。かくて成れる賓陽洞は即ち洛陽伽藍記の謂はゆる靈巖寺なり。初め代都の靈巖に擬して造りしが爲に、この名を用ゐしならむ。魏世龍門の寺は、石窟寺即ち今の古陽洞と、靈巖寺即ち今の賓陽洞とのみ。その餘も二三の洞窟あり。

雖も、皇家の檀興に非ず、且兩者の如き大洞に非ざるを以て著れざりきと見ゆ。又龍門八寺等の稱もあれど、その中には唐代の營造もあり。ざるを何れの世より靈巖寺を賓陽洞、石窟寺を古陽洞と呼び、賓陽洞前の寺を潛溪寺とは名づけ、又洛陽縣志、河南通志等、皆古陽洞を以て世宗、胡后の開鑿と爲し、賓陽三洞を以て唐時の所造と爲す。この誤謬は蓋し宋の歐陽修その俑を作れるにて、賓陽洞外に唐の魏王泰が龕像修飾の事を録したる伊闕佛龕碑あるを見て、端なく三洞鑿造の碑と以爲へるに出でたるなり。要するに賓陽三洞はその南洞の如き殊に後代鑄作の壁龕像少からず、又修補を施せることあるは言ふを待たざれど、洞窟と主要の像とは皆正光四年に成れるものなること、復動かすべからざるなり。北洞の本尊第五十圖は阿彌陀なるべし。ざるはその左方の挾侍菩薩第五十圖の額上に化佛を戴き、手に水瓶を執れるが觀音なるべきにて知らる。されば右方の挾侍菩薩第五十圖は勢至なるべし。聲聞の挾侍も亦本尊の左右に在り。これ佛の左右に聲聞と菩薩との四挾侍を具へたる五尊像式の最も古きものならむ。中洞は當陽の本尊第六十圖五尊像を具し、一、その挾侍菩薩左方は第六十圖、右方は第六十二圖に見ゆ。北南兩壁前にも亦各立佛三尊一具の像あり。第六十一圖は北面の三尊、當陽の坐佛は釋迦、南北の立佛は彌陀なるべし。北面の左挾侍、南面の右挾侍、共に寶冠に化佛を戴けり。三洞中この洞最も作工の精を極む。壁上には滿面に佛傳圖及皇帝皇后の禮佛圖第六十三圖は皇帝、第六十四圖は皇后、を浮彫せり。その皇帝は世宗、宣武帝、皇后は靈太后、胡氏なるべく、劉騰が帝の爲に造れるは即ちこの中洞なるべし。南洞は當陽に彌陀及挾侍の五尊像あり。第六十五圖は本尊坐佛、第六十六圖は北壁諸龕。抑、賓陽三洞は初めより皇家の勅造に係り、費功を吝まず、名匠を選びて、精を作工に致さしめしものなれば、その造像も皆に諸洞中最も巨壯なるのみならず、頗る工夫を凝らし、ものごおほしく、彫刻の作風も他に異なりて、面貌、衣褶三洞各變化を示せり。北洞の本尊は補塑の爲に下部全く原形を損じつれど、中洞の當陽及南洞の本尊は、各特相を有せる面貌を作り出し、その衣褶も古陽洞在來の像に似ずして、寫實の技巧頗る進歩し、襞線の曲直參差相交はり、或は流暢、或は曲折、配合の宜しきを得たり。南洞の本尊殊に衣褶の流麗を見る。中洞南北面の本尊立佛は、手より垂れたる衣縁に一種波狀の曲線を用ゐて、空前の變化を弄せり。頭は肉髻の大なること代都靈巖の像に同じく、皆螺髮に非ずして健駄羅風の髮容を爲せり。蓋し螺髮は當時未だ起らざりしなり。光背は頂後圓光周圍の寶相花より舉身周圍の火焰に至るまで、細巧精緻を極む。古陽洞以來慣用の手法愈進みたるなり。聲聞の挾侍は遙に後世羅漢像の典型を開けりと謂ふべし。挾侍菩薩の面貌は、中洞の像一種怡悅の相を帶べるもの、東西魏及高齊の間に最も行はれたる風にして、北南二洞の像は較、威嚴の相を帶び、各趣致を同うせず。その衣飾、在來古陽洞の諸像の如く、兩肩より懸りて胸前に交絡し、膝上に垂下彎曲せる天衣の形、こゝに至りて又變化を試み、中洞に在りては尙舊容を存すれど、既に胸前の交絡なく、肩より直ちに膝に垂れて交叉し、且當陽の本尊及南洞の挾侍菩薩は、既にこれに瓔珞を加へてその美を増し、北洞の挾侍菩薩に至りては、腹下膝上二重に懸りて交叉せず。たゞ瓔珞に遺形を傳ふるに過ぎず。後者は隋唐までも行はれたる様式を開けるものなり。菩薩の光背は皆前來の如く

寶珠形を用ゐ、その寶冠と共に裝飾巧緻を加へたり。天蓋の垂飾は我が法隆寺金堂の如き形式既に起れるを見る。中洞の佛傳及禮佛圖に至りては、魏世浮彫の極致にして、その美妙歎賞の外あらず。かくの如く賓陽洞は實に當時に於ける意匠變化の數を窮めたるものにして、作者の苦心慘憺たるものありしこと、想ひ見るに難からざるなり。

古陽洞と賓陽洞との間に蓮花洞あり。賓陽洞に次いで鑿造せられたりと見ゆ。その壁龕像銘の最も古きもの孝昌三年なれば、この洞蓋し孝昌の頃成りしなり。洞口大にして、洞外より頂上天蓋の蓮花見ゆるが故に、この名を得たるならむ。花蓋の周圍には飛天を刻す。挾侍は本尊立佛の左右に聲聞と菩薩とあり。後者は南北の壁を背にして立つ。三面の壁上又像龕櫛比せり。第六十八圖左方の聲聞挾侍手に錫杖を執れる

もの。第六十八圖は、大迦葉尊者なるべし。面貌頗る奇偉にして、その衣襷は賓陽中洞當陽本尊の如き式より出で、更に一變化を示せり。挾侍の菩薩第六十九圖は、怡悅の面相。賓陽中洞の像に似たり。この風漸く行はるゝを見る。本尊立佛兩手下の袈裟縁直垂して、膝下の衣褶と共に極めて

流暢なる一種の特致を成せり。この風盛に東魏、高齊に行はる。即ち北魏末造の新典型なり。壁龕の諸像衣褶の彫法、古陽洞の世宗、肅宗代の作に似たるもの。第七十圖左方、賓陽南洞の本尊に類するもの。第七十一圖左方、その餘後年所造の像亦少からず。龍門諸洞の外、山東歷城の黃石崖及鞏縣石窟寺等、北魏代の洞窟摩崖の諸像あり。雖も、今姑く省略に従ふ。

北魏の彫刻家にしてその名の今に傳はれる者、獨り博士李雅あり。河南登封少林寺の諸像を作りて精妙を極む。尙石匠雷卑の蕭齋に於けるが如し。宣武、胡后の頃、佛法經像極めて盛なり。永寧寺塔像の壯麗と洛陽諸寺行像の流行とは、竝に史傳の錄する所。名手世に出で、遺品今に多きも亦所以あるなり。されば龕窟摩崖の外、金石諸像の傳存するもの少からず。刻銘なきが爲に製作の年月明ならず。雖も、こゝに掲ぐる二佛並坐白玉石像第七十三圖及白馬寺出土彌勒玉石像第七十四圖の如きは、皆北魏を降らざる製作と思はる。二佛並坐像及兩面像は、座前の垂衣中部短く左右長く垂れたる形、正光頃の様式なること、他の有銘の像に依りて證せらる。兩面像の背面二佛並坐龕上の彌勒は、尙交脚の舊様を傳へたり。白馬寺出土の彌勒は、脚下の垂衣蓮花洞の迦葉に近し。北魏末の作なること疑なからむ。

東魏の世、龍門、鞏縣の諸洞造像相尋いで絶えず。又歷城千佛山の摩崖像盛に鑿造せられき。窟崖以外の石像遺品亦少からず。天平四年正月の所造に係る立佛三尊石像第七十六圖、興和四年の所造と考へらるゝ。沙彌法盛の兩面白玉石碑像第七十七圖は、表面、第七十八圖は背面、等、以て當時の様式を觀るに足れり。殊に前者の流麗なる衣褶は、蓮花洞本尊の一層の進歩したるものと評すべく、その面貌極めて溫雅なる佳作なり。碑像は北魏の末に始まりて、盛に東魏、齊周、隋唐に行はる。その大なるものは丈に餘り、小なるものは尺に盈たざるあり。惟ふに事を成してこれを碑に勒し、世に示し後に傳ふるは、最も人の喜ぶ所なるを以て、龍門等窟崖の像、皆碑形を像側に作りてこれに銘せり。然れども窟龕摩崖

は隨處にこれを造るべからず、石像の舉身光背はこれに適せざるものあり。こゝに於いて窟崖の龕像に仿ひて、像を碑石の面に造り、併せて銘を刻し、これを通衢廣庭に立つること起る。されば窟龕の造像に恰好希有なる龍門に近き洛陽の既に帝都に非ざる東魏に至りて、忽ち碑像の隆盛を致せるならむ。多くは龍矩を碑頭に造り、矩間題額の位置にも龕を設けて像を刻し、碑面、碑陰或は一層、或は數層に龕像を彫出し、碑文は或は下邊又は兩側に刻するを常とす。由來魏齊隋唐の石像は、殆ど皆光背を地と爲したる半出像と謂ふべきものにして、光背と云ふ物抑、かゝる作法の像を造るが爲に生じたるに外ならざれば、その碑像を生じ來るも亦所以なきに非ず。況やその龕飾、天蓋、飛天等の莊嚴を彫出するに最も便利なるをや、碑像の行はるゝに方りては競ひて佳石を選び、これを荆山に採ること毎に銘文に記されたり。かくて碑は元その準志の功業を勸するに在るを以て、佛像碑はおのづから他の美事善業の爲に立つる所の碑と合體し、造寺、鑿井、治路、架橋乃至官人の德政を頌する碑にも亦佛像を彫出すること、盛に東魏、高齊に行はる。龍矩の碑頭を有せずして、兩面又は四面に像を彫せるものを單に兩面像、四面像と云ふ。その盛に行はるゝや、刻面の多きを好むよりして、更に六面石柱像起る。これ等と同時に塔形を造りてその四面に或は一二級、或は三四級の龕を設け、像を彫すること行はる。即ち小石浮圖なり、竝に多く遺品を今に傳ふ。西魏は時を東魏と同うす。雖も、その都せし長安は、姚秦の後久しく王都に非ざりし地なるを以て、東魏の鄴都が中州に在るに異なり。こゝを以て造像の盛は遙に東魏に及ばず、然れどもその様式と像品とは略東魏の如し。今東西魏代の製作と思はるゝ石像の遺品を舉げむに、長安草堂寺舊藏坐佛三尊像第七十圖は、座前垂衣の褶襞頗る先の沙彌法盛の兩面像に似たり。佛の頂相は螺髮に作り、螺髮は蓋し北魏末乃至東魏の頃に始まりしならむ。黃玉石坐佛三尊像第八十圖は、座の三面に造像者及其の眷屬の供養像を刻して各、名を題したれど、銘文なく。又年月あらず。正面の像、三尊の外に師子及香爐あり。彫出の隆起極めて高くして而も頗る精巧なること、稀に觀る所たり。佛の頂相螺髮なること前者に同じ。光背の背面に、定印の坐佛と二聲聞の挾侍とを彫す。その肉極めて低くして殆ど刻畫なり。洛陽白馬寺の舊藏なりきと傳ふ。立菩薩緇石像第八十一圖は、衣褶の彫法武定の年號ある遺作に似たれば、亦東魏の製なるべし。立菩薩青玉石像第八十二圖は、像式前者に似て瓔珞の莊嚴頗る美なり。この二像は、その趺を別石もて造れる華座に挿入して立たしむるものにて、兩魏以降行はれたる作法なり。半跏坐の彌勒白玉石像第八十三圖も亦白馬寺の舊藏と聞く。その作風興和、大統頃の式に屬せり。坐佛三尊黃玉石像二軀第八十四圖及第八十五圖も製作亦東魏に在るべし。その方趺は金像に倣ひて作れるものにて、一時行はれきと見え、この餘尙類品に乏しからず。黃玉石四面像第八十六圖は二佛並坐等を四面に彫出し、作風亦前諸像に似たり。立彌勒三尊白玉石像第八十七圖及第八十八圖も亦復兩魏代の遺品たるを疑はず。

金銅像は元魏の世製作極めて盛なり。帝王、名臣その他道俗の或は數十百軀、或は數千萬軀を造る者あり。多くは皆小像なり。雖も、その數の夥しかりしこと寧ろ驚くに堪へたるものあり。等身、丈六、丈八の大銅像も比年各地に建立せられしこと、竝に文獻の明徴に乏しからず。

こゝを以て屢滅法の厄に遭ひ、大抵鎔毀せられしに拘はらず、潜壤の遺品、出土殆ど無數にして、我が國に流傳せるもの亦少からず。太和以降隋唐に至るまで、像品様式の變遷は略明にこれを識ることを得へし。前出太和六年及九年の金銅像の後、太和十四五年頃より景明末年に至るまでの間、一種の觀音小金像頗る行はれき、一手に未敷蓮花を執り、一手に水瓶又は衣端を執るを常とす。背趺亦一定の形式を爲せり。こゝに太和十六年比丘慧教所造の一軀第九十八圖は背面、第九十九圖は表面、第一〇〇圖は背面、第一〇一圖は表面を掲げてこれを例示す。又太和末より北魏の末に至るまでの間、二佛並坐の像行はる。當時これを多寶像と呼べり。この兩種の像には、光背の背面に肉薄き浮彫又は刻畫を作れるもの多し。これ太和初年以來の流行なり。こゝに太和二十一年鄭儀皂所造の一軀第九十九圖は表面、第一〇〇圖は背面、第一〇一圖は表面、第一〇二圖は背面を掲ぐ。その細線を並行せしめたる衣文は、金石の兩品に通じたる正光間の一種の様式なり。神龜二年林師德所造の彌勒立像第九十圖は表面、第九十一圖は背面、第九十二圖は表面、第九十三圖は背面は光背の漏空文様、華趺と共に頗る巧なり。この頃よりして高齊の世に至るまで、この種の漏空文様の光背往々遺品に見る。正光三年金德所造の釋迦坐像第九十四圖は表面、第九十五圖は背面、第九十六圖は表面、第九十七圖は背面は、化佛の彫法先の太和六年及九年の像の遺風に屬せれど、像は神龜二年の彌勒と趣致相似たり。立菩薩金銅像第九十八圖は表面、第九十九圖は背面、第一〇〇圖は表面、第一〇一圖は背面は刻銘なきを以て年曆明ならざれど、前出の石像に對較して、北魏末の製作と考へらる。先の太和六年及九年の二軀とこの像との如きは、支那出土金像の最も大なるものにして、その餘の金像の殆ど皆一二寸乃至四五寸以下のものゝみなるは、前にも言へる如く、滅法の厄を免れて偶存するもの多きに居るが爲なりとす。上記數種の外、東西魏代に至るまでの作と思はるゝ小金像には、尙觀音、雙觀音、七佛及文殊、普賢等少からず。雙觀音は一光又は雙光にして、一座の上に並立す。先の未敷蓮觀音と異なりて、一手に白拂若は楊柳を執り、その曲腰の形に特徴あり。七佛は一根七枝の華趺に坐して相連れり。文殊は師子、普賢は象に乗りて坐するを常とす。又佛若は觀音を中尊とせる三尊、五尊、乃至七尊一具の小金像あり。或は一座の上に在り、挾侍は往々華座の蓮枝を中尊の座邊に挿入す。或は別座の像を列置するものあり。師子及香爐を捧げたる化生の小像亦少からず。竝に金像の布列に用ゐしならむ。

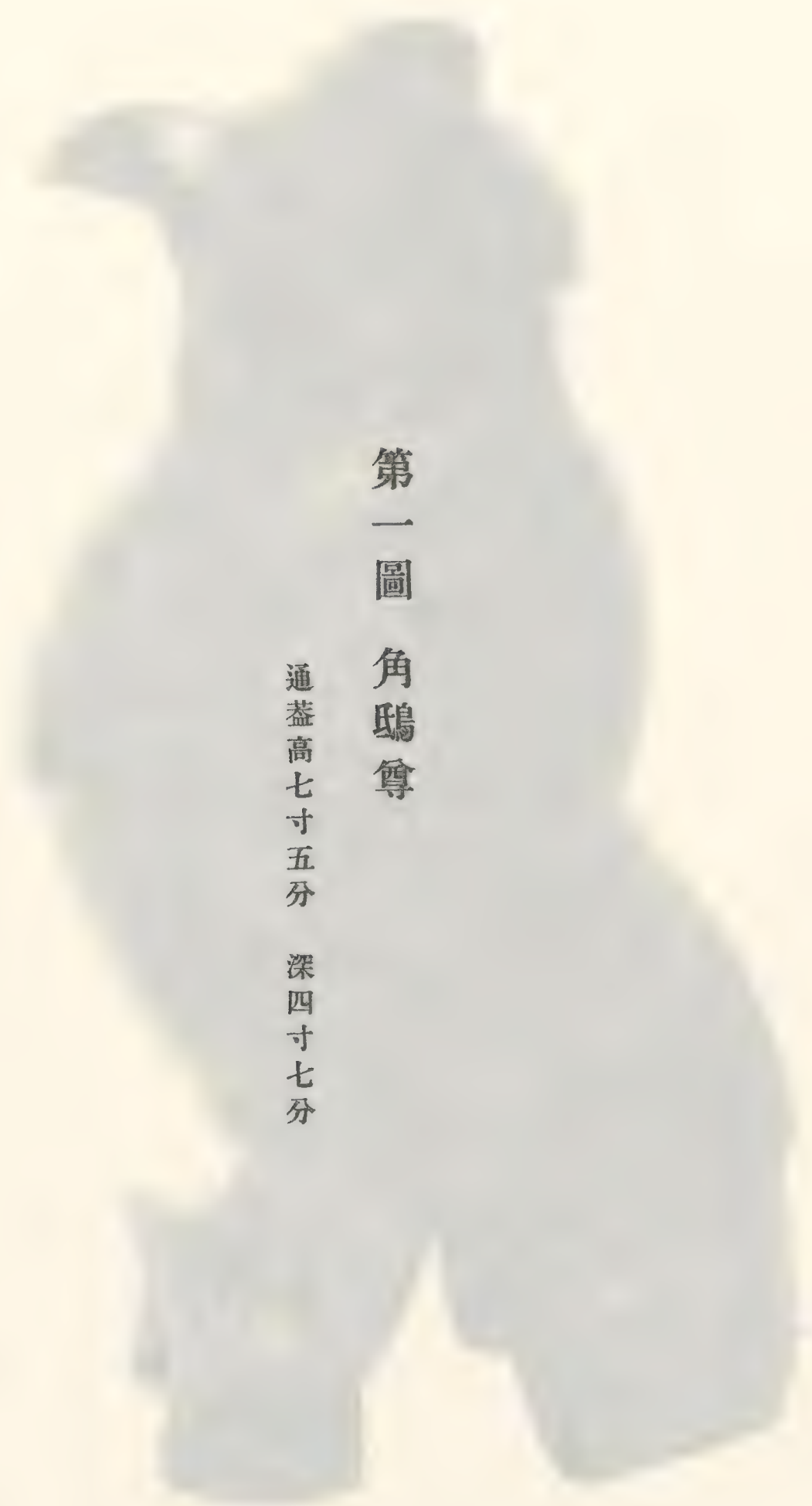
元魏の道像

道教の由りて來るや久し、草昧の俗より自然に發生せる太古の天地山川及先王前賢の祭祀に於ける神在すが如き感念にその端を啓き、黃帝昇僊の傳説に憧憬し、濱海潮氣の現象に蓬萊の仙島を夢想し、王者長壽の欲望に助成せられ、後には佛教の影響を受け、辟穀導引の法を練行し、終に授籙、醮齋、設像の形式を備へ、以て一種の宗教を豎立せるなり。秦の始皇、漢の武帝共に神僊を好み、方士を近づけしより、斯道漸く興る。後漢の末に至りて初めて道士三張あり、三國の世、吳の二葛亦道を弘め、道教の名始めて起り、道館亦始めて置かる。晋世道術を能くする者少からず。劉宋の世、道士陸修靜、宋文明等出で、齋儀、科籙、道壇、上香、跪拜、衣冠の式法を制す。この頃よりして始めて天尊、老君の像設あり。これを道觀に安置すること猶寺院の佛像の如し。元俗巫の活を取るに方なきが爲に、佛家の制を學びてこれを作れるに出づ。元始天

尊は即ち道教の大神にして、無極大羅の天上、玉京金闕の玄臺に居り、無量の仙聖、仙官、仙童、玉女を率ゐて以て宇宙を治すと云ふ。太上老君は即ち老子にして最尊の天仙なり。道教の説老子に本づくが爲にこれを崇むるなり。爾來蕭齊、梁陳皆道像あり。天尊と老君とは、像容を以て差別すること難し。並に多くは坐像にして道冠道服を著け、左右に二真人を侍せしめ、或は蓮花の上に在ること、總べて佛像に似たり。由來佛像の摸倣に出でたるが爲のみ。元魏の世、太武帝深く道教を好み、嵩山少室の道士寇謙之の法を信行し、終に佛法を破滅するに至りぬ。故を以て道教頗る盛にして、道像の遺品今に少からず。こゝにその二三を掲げむに、一は鄆州石泐寺舊藏の天尊石像第九十圖にして、銘文漫滅、僅に「永平」道民の數字讀むべきのみなれど、永平年間の所造なることはこれに由りて明なり。天尊は虎皮の座に踞す。二真人合掌して立ち、二仙童虚空に飛べる様、光背の火燄とは、さながら佛像の如し。天尊の持物は未だ詳ならず。一は正光二年四月の刻銘ある天尊像第九十圖にして、結跏趺坐して右手に符を執れり、二真人合掌の像略前者に同じ。銘文に「家口廿人、龍花の三會に、願はくは初首に在らむ」と曰へるを見れば、道佛二教信仰の混淆せるを知るべし。この二軀衣褶の彫法は、即ち當時流行の様式なり。佛像に四面像行はるれば、道像も亦これに倣ひて往々四面像を造れり。こゝに掲ぐるは西安樓觀臺の舊藏なりし四面道像の二面第九十七圖にして、挾侍ある三尊像形式の大體より、天尊右手の説法相、寶珠形の光背、化佛に似て蓮花に坐せる二真人及飛天等に至るまで、佛像の摸倣愈顯著なるを認むべく、座前に香爐を刻し、その左右に道民の供養像ありて、各、その名を題せるも、亦皆同年代の佛像と其の趣を一にせり。

碑碣の彫飾

碑は初め圭首を常とせしが、後漢の中頃よりして、その圭形の碑首及兩旁下邊に四神、六玉等を彫飾し、又は碑頭を琬形にして二重若くは三重の暈を作ること起り、既にして琬首の暈を龍形に作ること始まりぬ。これ即ち元魏の謂はゆる龍矩、李唐の謂はゆる螭首の由りて來る所なり。龍矩は碑首を飾るに二龍交絡の形を以てす。故に又交龍碑と云ふ。二龍の間に題額を置く。額形には古の圭首の遺形を傳へたり。蕭梁の始興王碑は琬首の縁に龍飾を作りて尙漢碑に似たれども、元魏の文懿高公の碑は、既に精巧なる交龍碑首を成せり。今石碑龍矩の一例として、近年洛陽白馬寺出土の交龍斷碑首第九十圖を掲ぐ。こは佛教の碑像にして額に三尊を彫出し、碑面上部に菩提樹及飛天供養の相を刻したれば、その下に如來成道の相を作りしものならむ。碑首の交龍頗る文樣的にして、未だ唐碑の如き寫生風の龍と爲らず。品致極めて高雅、技巧頗る精妙なり。作風全く高公碑に同じく、高公碑は東魏天平三年の所立と考へらるゝが故に、この碑像亦東魏の作なること疑なしとす。



第一圖 角鴟尊

通蓋高七寸五分 深四寸七分



第二圖 犧尊

通蓋高七寸 深四寸二分

[illegible][illegible]

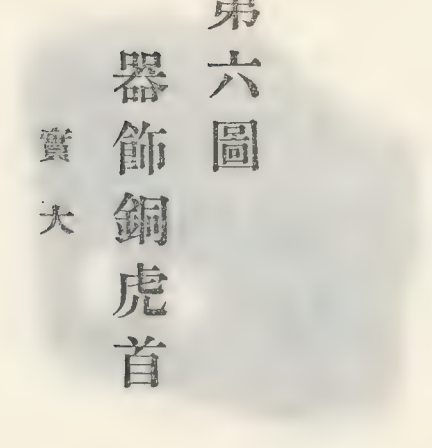




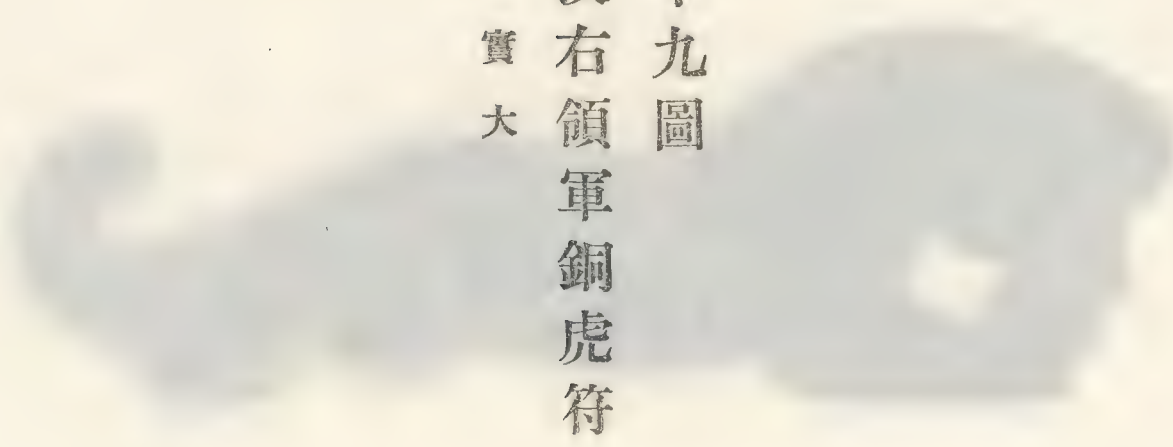
第三圖
器飾銅儀首
實大



第五圖
器飾銅螭首
實大



第六圖
器飾銅虎首
實大



第十九圖
漢右領軍銅虎符
實大



第四圖
器飾銅儀首
實大

圖六
臺灣地圖
卷四圖

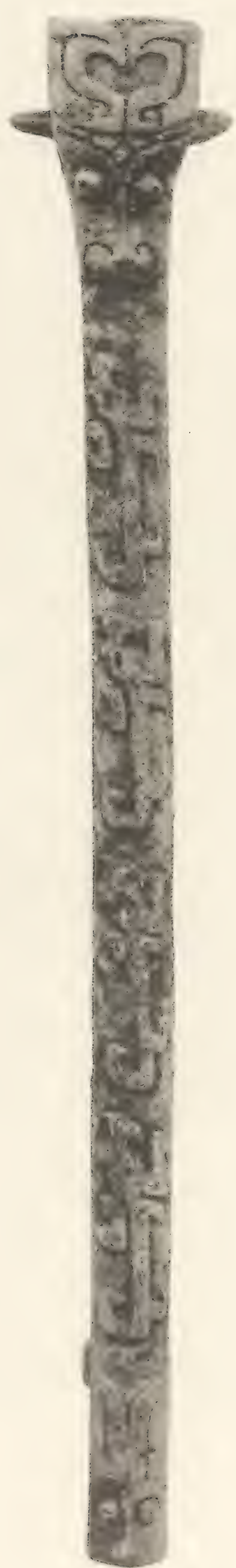
圖六
臺灣地圖
卷三圖

圖六
臺灣地圖
卷六圖

圖六
臺灣地圖
卷五圖

圖六
臺灣地圖
卷十圖

臺灣地圖





第八圖 瑞玉瓏

長徑五寸五分

東京 竹內金平君藏



第七圖 躬圭

長六寸

北京 黃中慧君藏



車原 竹内金平 著

其書正々正々

第八圖 藤王藤

北京 孫中 著

其書正々

第九圖 藤王藤



第九圖 漢祠堂壁石浮彫畫象

東京 早崎稗吉君寫真



模式圖 萬福堂墾計管線圖

萬福堂墾計管線圖



第十圖 漢祠堂壁石浮彫畫象

高一尺八寸二分 濶五尺三寸三分

東京帝室博物館藏

東京市立博物館

第一八七二卷 第三十三卷

第十圖 萬國堂型石印書局



第十一圖 漢祠堂壁石浮彫畫象

高二尺五分 濶一尺八寸

東京帝室博物館藏

軍學要義新編

第二八五卷 第一八八

第十一圖 陸軍要義新編



第十二圖 漢祠堂壁石浮彫畫象

高二尺七分 濶一尺九分

東京帝室博物館藏



東京帝國大學

第二〇九號 第一〇五号

第十二編 東亞堂塾生答謝書



第十三圖 漢四神瓦當蒼龍

徑六寸三分

第十四圖 漢四神瓦當白虎

徑同上

卷之三

第十三圖 萬四師其當其

卷之三

第十四圖 萬四師其當其

卷之三





第十五圖 漢四神瓦當玄武

徑六寸三分



第十六圖 漢四神瓦當朱雀

徑同上

東京大倉喜八郎君藏

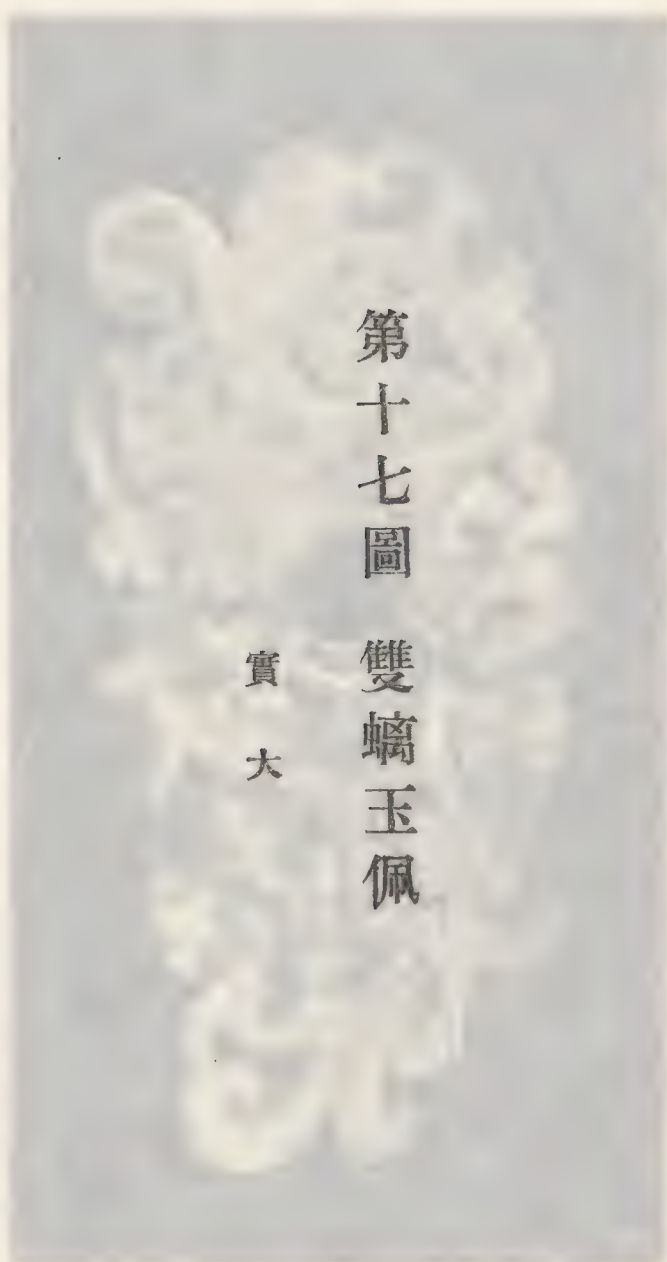
第六十三卷

第十正圖 第四轉其當求

第四卷

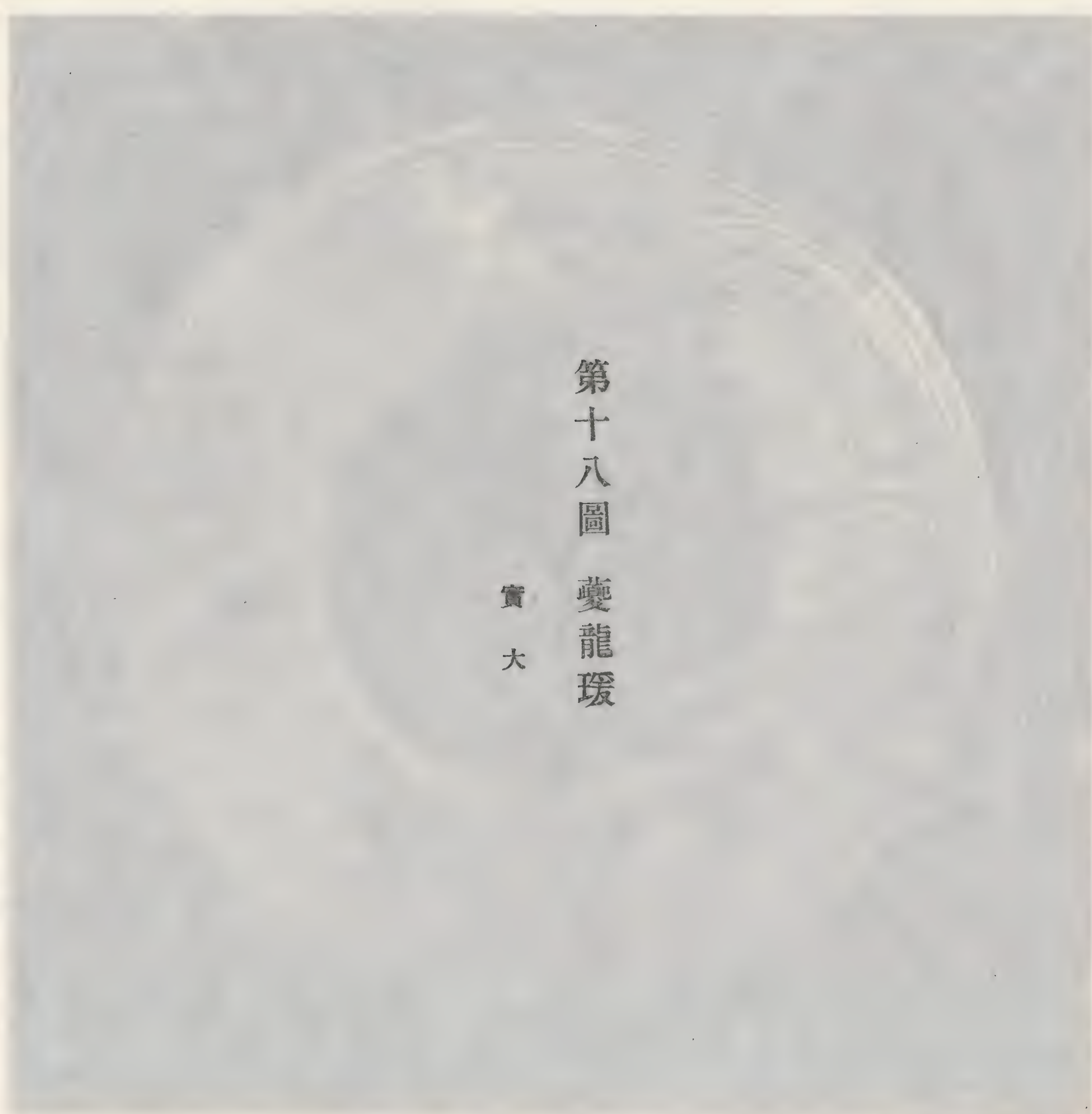
第十六圖 第四轉其當求





第十七圖 雙螭玉佩

實大



第十八圖 夔龍瑗

實大

第二十圖 豐碑正冊

豐碑

第十八圖 夢跡

夢跡

東京 早稲田書局



第二十圖 祖 卣

通蓋高一尺二分 口長徑五寸二分 腹長徑九寸三分

東京 古河虎之助君藏



重刊 高麗書

蘇蓋高一只二卷 口外書莊十二卷 題外書莊武十三卷

第二十圖 山





第二十一圖 百獸壺

高九寸四分

東京帝室博物館藏

第二十一圖 百題

百題

百題





第二十二圖甲 漢建安十年鏡

徑四寸三分

京都 桑名鐵城君藏



第二十二圖乙 尚方作鏡

徑六寸四分

東京帝室博物館藏

新編 萬世正統

卷之二十一

卷之二十一 國甲 萬世正統

新編 萬世正統

卷之二十一

卷之二十一 國乙 萬世正統

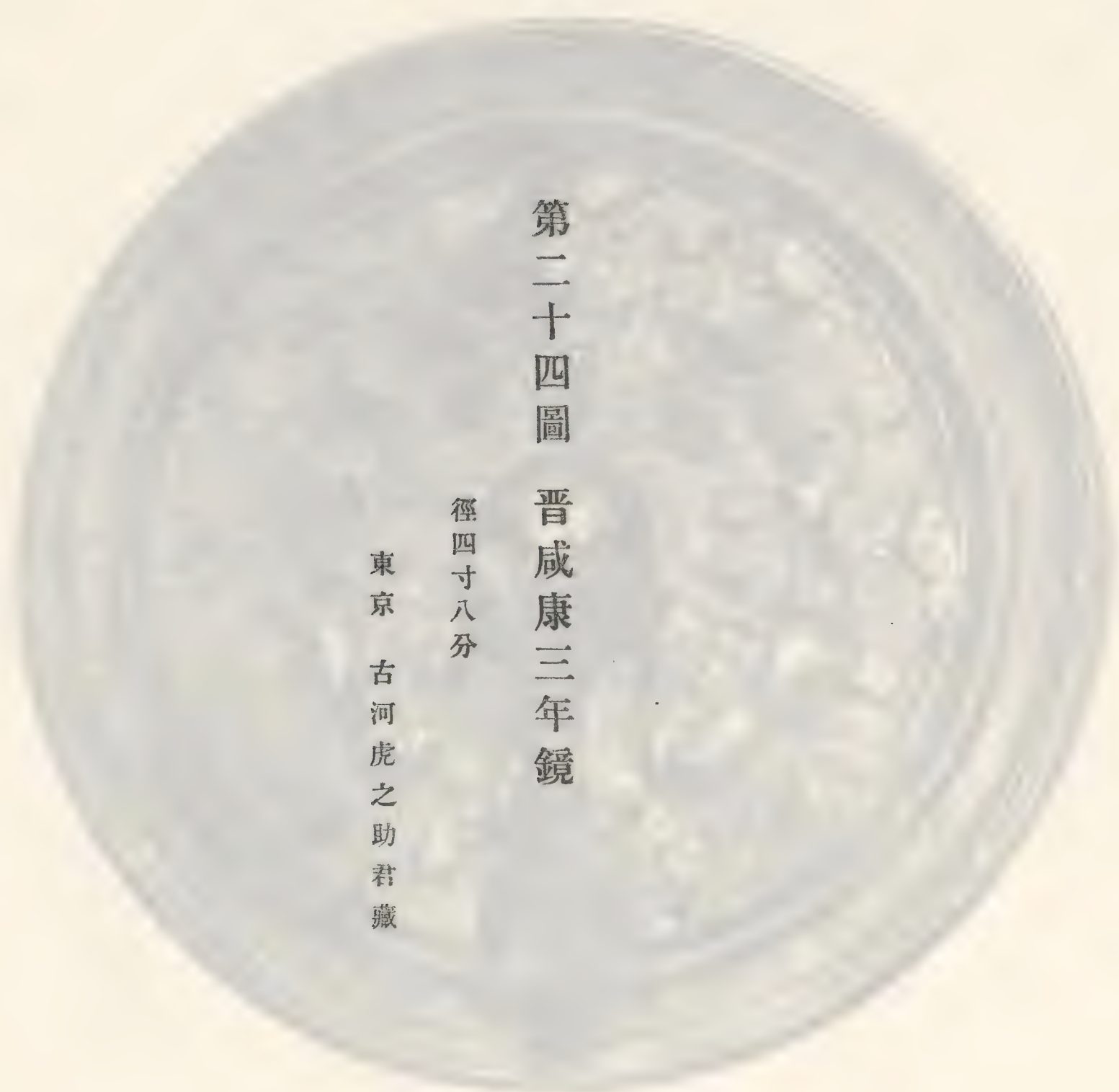




第二十三圖 晋泰始元年鏡

徑七寸五分

東京帝室博物館藏



第二十四圖 晋咸康三年鏡

徑四寸八分

東京 古河虎之助君藏

漢代書畫史略

卷之五

漢代書畫史略

漢代書畫史略

卷之六

漢代書畫史略



第二十五圖 神人怪獸鏡

徑五寸四分

東京 竹內金平君藏

第二十六圖 苻秦太初四年鏡

徑四寸三分

東京帝室博物館藏

卷二十一 正國 神人并靈

卷二十一 正國

神人并靈

卷二十六 國 蘇秦之說

卷二十六 國

蘇秦之說



第二十七圖 孟氏作鏡

徑六寸五分

東京帝國大學文科大學標本室藏

第二十五圖 盒丑并鏡

第六卷

東京帝國大學文部大學圖書部藏



第二十八圖 張氏作鏡

徑六寸

東京 竹內金平君藏

第二十八圖 提其哈爾

第六十

廣東省城金華書局



第二十九圖 大同雲岡石佛寺窟龕

東京 早崎稗吉君寫真



第二十六圖 大同雲岡石窟造像

佛身 佛像與菩薩像



第三十圖 大同雲岡石佛寺東洞大佛像

東京 早崎梗吉君寫真



東國 學藝圖書院藏

第三十圖 大同書局訂定東國大辭彙



第三十一圖 大同雲岡石佛寺東洞大佛右挾侍菩薩像

東京 早崎稷吉君寫真



卷三十一圖 大同雲岡石窟寺東甬大甬石窟寺善壽窟

東甬 善壽窟 善壽窟



第三十二圖 大同雲岡石佛寺西洞佛像

東京 早崎稗吉君寫真



卷三十二圖 大同雲岡石窟寺西廊佛龕

東 西 廊 佛 龕 圖



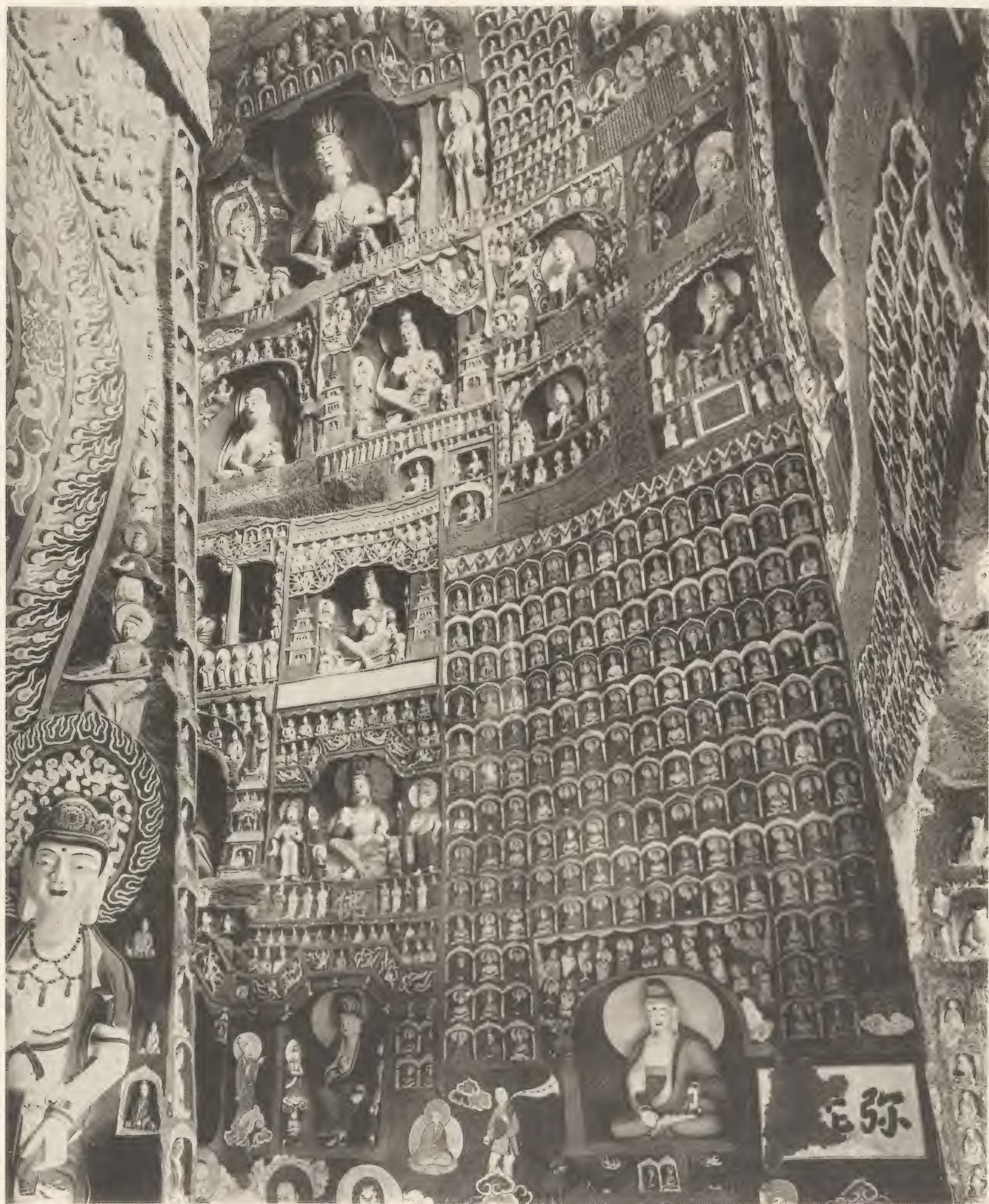
第三十三圖 大同雲岡石佛寺第二洞下層左壁

東京 早崎稗吉君寫真



卷三十三圖 大同雲岡石窟寺第二窟不願立塑

東京 早稻田大學圖書館藏

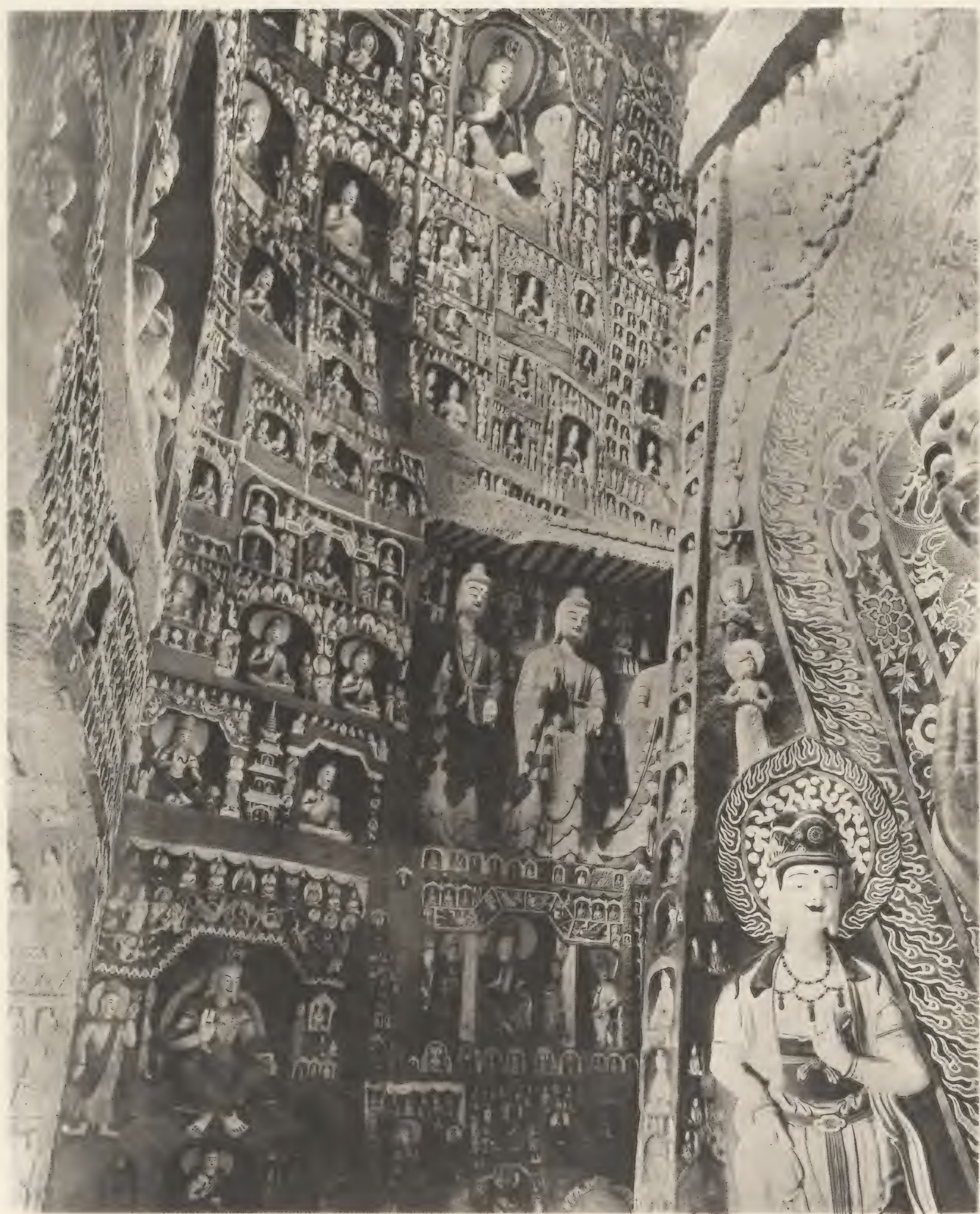


第三十四圖 大同雲岡石佛寺第二洞下層右壁

東京 早崎稗吉君寫真



像三十四圖 大同雲岡石窟寺第二窟千佛造像



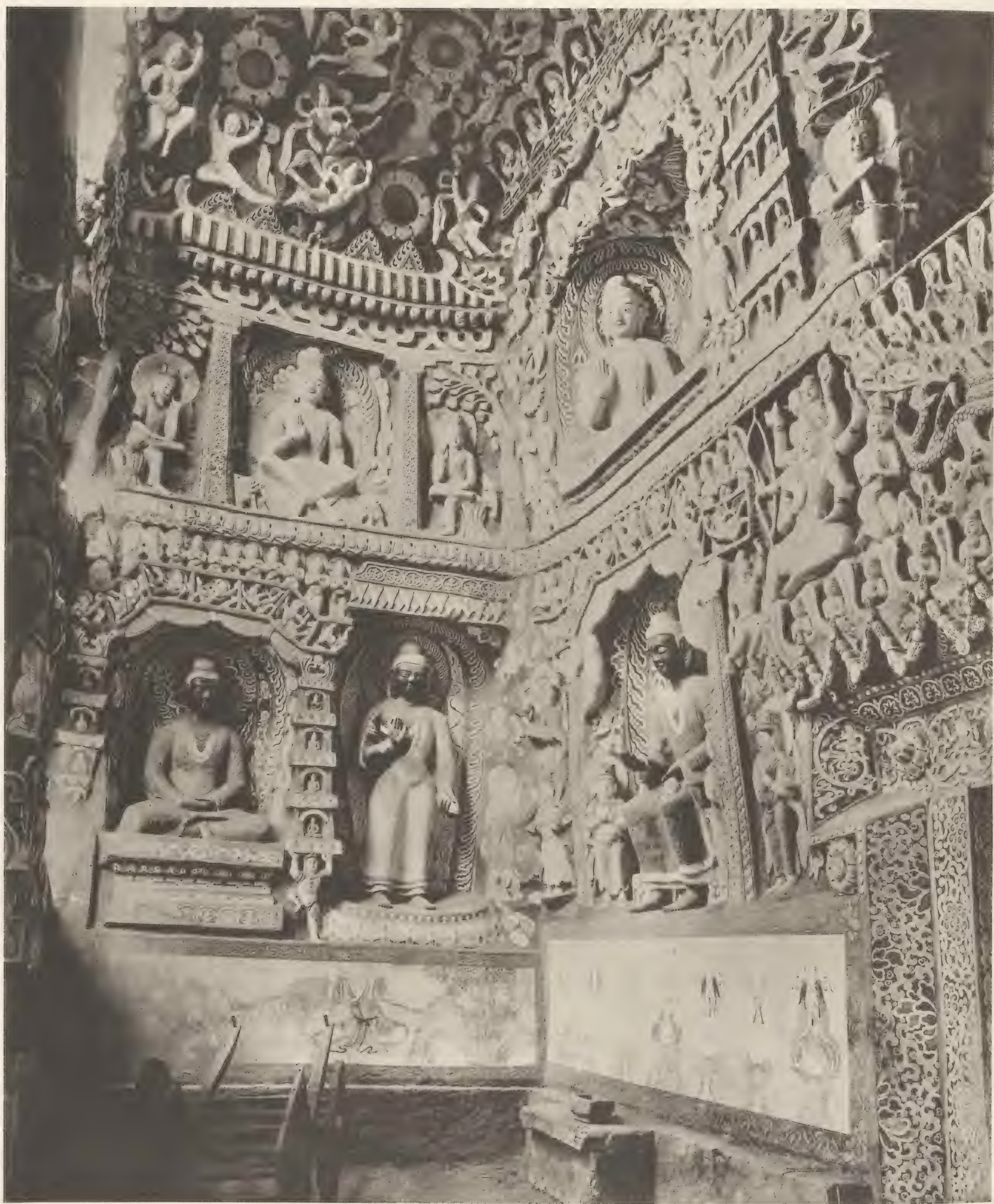
第三十五圖 大同雲岡石佛寺第六洞

東京 早崎稗吉君寫真



卷三十五圖 大同雲圖 存 卷六圖

東京 早稲田書院藏



第三十六圖 大同雲岡石佛寺第二洞上層正面本尊

東京 早崎梗吉君寫真



東京 印刷所 印刷

第三十六圖 大同製同不附者第二圖土制五面本製



第三十七圖 大同雲岡石佛寺第二洞上層

東京 早崎稗吉君寫真



卷三十四圖 大同建國各縣志二附土氣

大同建國各縣志二附土氣



第三十八圖 大同雲岡石佛寺第十二洞

東京 早崎梗吉君寫真



第三十八圖 大同委同石書卷十二附

漢書 卷一百一十五





背面

東京 益田 孝君藏

高一尺三寸三分

第三十九圖 魏太和六年造釋迦金銅像



表面

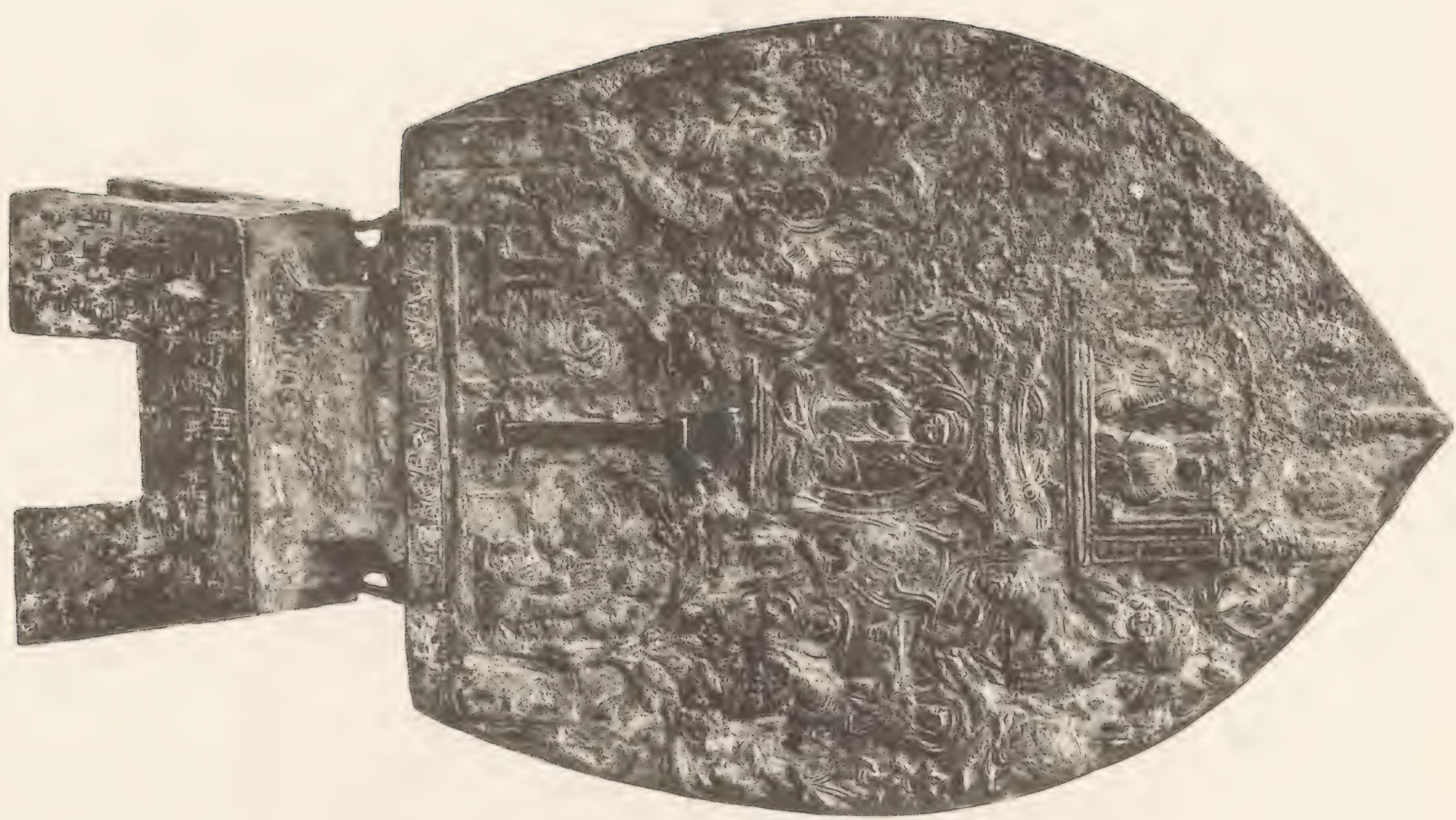
背 面

東京 芝田 永徳齋

第一五三三三卷

第二十次圖 藤太麻六平 並 順金 附 附

背 面



第四十圖 魏太和九年造金銅佛像

高一尺二寸

東京 古河虎之助君藏



高一尺二寸

東京吉田東山藏

後四十圖 續太麻止辛錄金剛山集



第四十一圖 龍門古陽洞北壁最東部



朱義造觀音像

永平四年

曹連造釋迦像

永平二年

比丘尼法文法隆等造彌勒像

永平三年

比丘尼法慶造彌勒像

東京早稻田吉音齋

以丑以書漢書卷之四
永平三年

以丑以書漢書卷之四
永平二年

曹孟德碑
永平四年

朱善堂碑

景四十一圖 諸門古關諸北壁景東



第四十二圖 龍門古陽洞北壁東部

景明三年

高樹等造像

楊大眼造像

永平四年

安定王造像

景明三年

比丘惠感造彌勒像

江戶時代の政治
制度

明治維新
の政治

明治維新
の政治

明治維新
の政治



第四十三圖 龍門古陽洞北壁西部



正始二年
王史平等造彌勒像

王婆羅
門造像

永平三年
比丘尼法行造定光像

永平四年
僧道略造彌勒像

東京 早崎 穂吉 君 寫 眞



第四十四圖 龍門古陽洞北壁



魏靈藏造像

延昌元年
劉洛眞兄弟造
彌勒像二軀

永平二年
比丘尼法文法
隆等造彌勒像

第四十七圖 龍門古陽洞北壁



安定王造觀音像二軀

夏侯
叔造像

正光四年
比丘尼法冷造
釋迦像

蘇万成
造像
艾祚
造像

佛七造德五李

第四十八圖 龍門古陽洞北壁



永平四年
比丘尼法興造
彌勒像

黑龕生兄弟造像

黑龕生造像

楊道襄造像

正光二年
比丘惠榮造釋迦像

正光二年
王永安造像

新加坡

檳榔嶼

吉隆坡

怡保

第四十八圖 門古蘭嶼北界

馬六甲

芙蓉

安順

太平

馬六甲

芙蓉

馬六甲

芙蓉

馬六甲





第四十五圖 龍門古陽洞北壁



第四十六圖 龍門古陽洞北壁

卷四十六 西門外順治寺

卷四十五 西門外順治寺



第四十九圖 龍門古陽洞北壁



第五十圖 龍門古陽洞北壁



第五十一圖 龍門古陽洞北壁下部



100

● 漢書

東京 華僑總會 謹此

100%

夏 漢
漢 書
漢 書

五世同堂

第五十一圖 龍門石窟北壁不語



第五十二圖 龍門古陽洞北壁

杜穩定造像

張承口造像



第五十三圖 龍門古陽洞北壁下部

天平三年
比丘尼曇會造
觀音像



第五十四圖 龍門古陽洞南壁

神龜二年
杜匡安
造天量
壽佛像

天平四年
孫思合造
觀音像

天平二年
僧清長造
彌勒像



昭和二十二年

東京學藝大學
古書刊行

東京學藝大學
古書刊行
昭和二十二年

第五十四圖 龍門石窟南壁

東京學藝大學
古書刊行
昭和二十二年

東京學藝大學
古書刊行

東京學藝大學
古書刊行



第五十五圖 龍門古陽洞南壁東部

神龜三年
趙阿歡等造彌勒像

景明三年
邑子孫秋生等造像

景明四年
比丘法生造像



第五十六圖 彌勒白玉石像

高二尺一寸

東京 早崎稗吉君藏



卷正十六圖 輿尊白正百翁

高二十八寸

厚一尺一寸



第五十七圖 龍門賓陽北洞本尊佛像

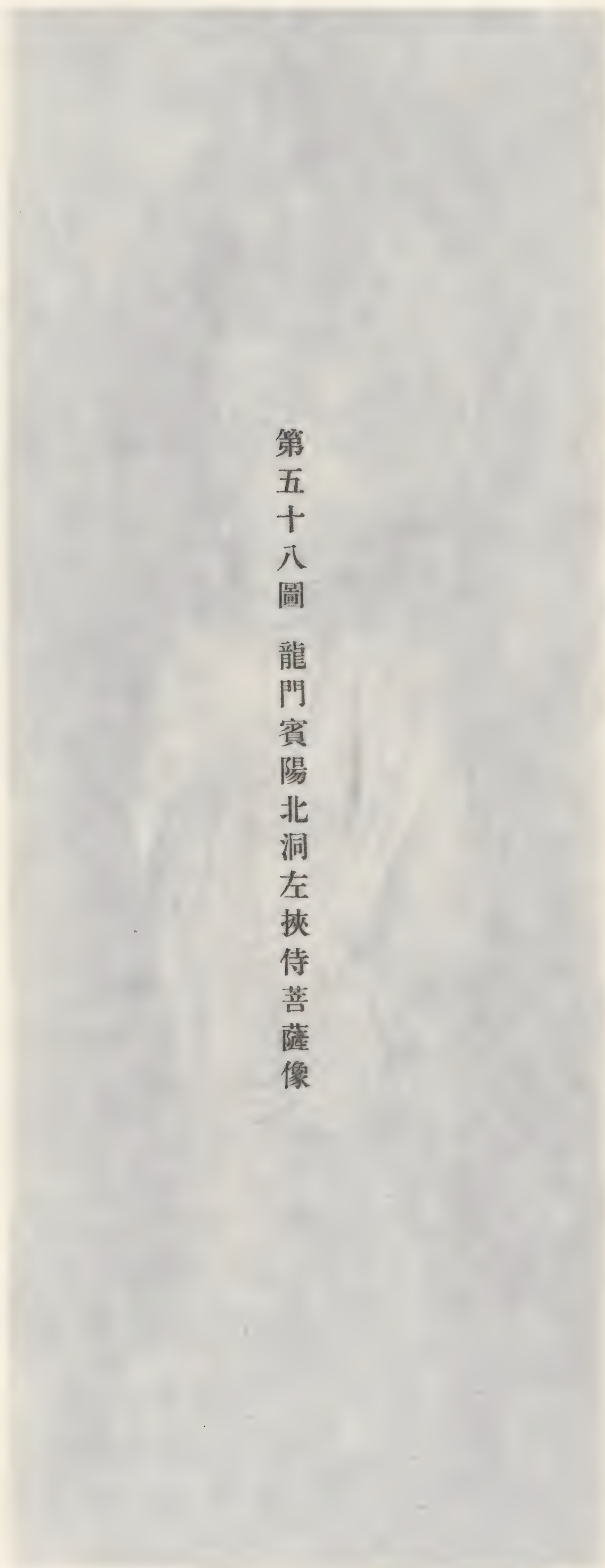
東京 早崎梗吉君寫真

第五十圖 諸門實圖非本尊附錄

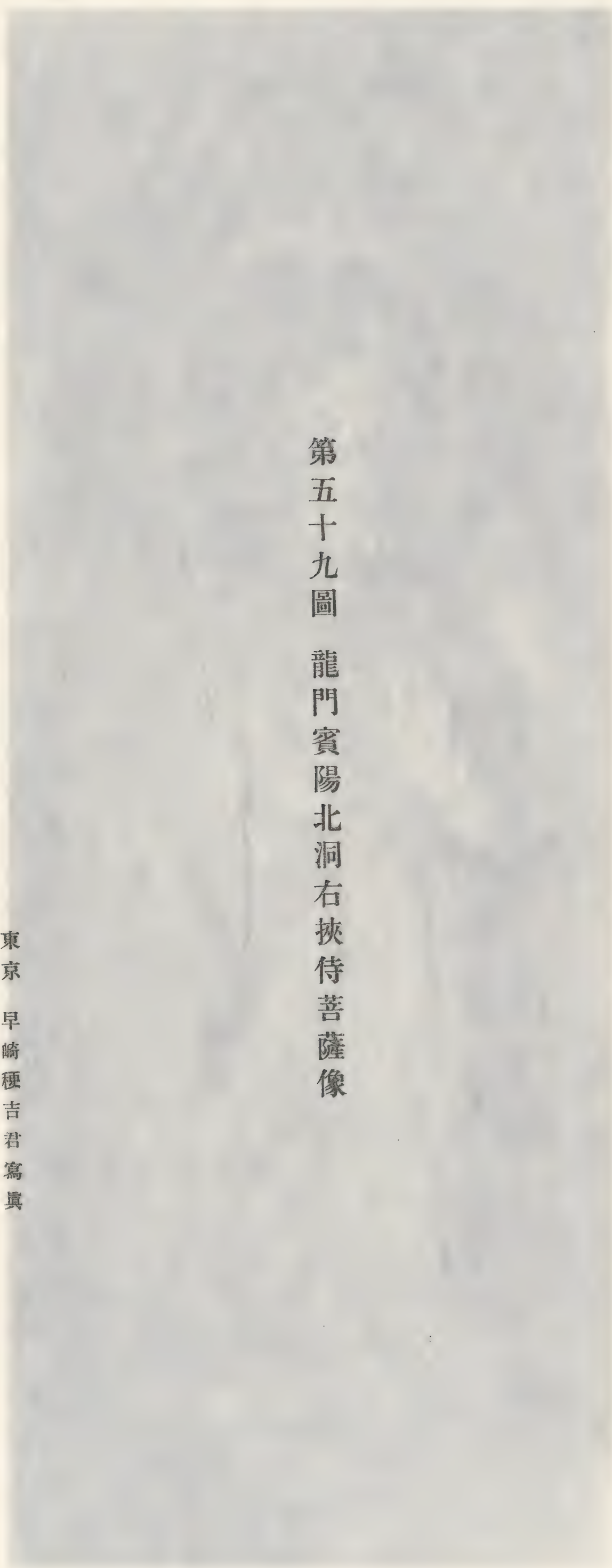
五五 華嚴經會疏卷五



第五十八圖 龍門賓陽北洞左挾侍菩薩像



第五十九圖 龍門賓陽北洞右挾侍菩薩像



續正十八圖 鼎門寶圖非同式與卦著圖

續正十八圖 鼎門寶圖非同式與卦著圖



第六十圖 龍門賓陽中洞當陽本尊佛及挾侍聲聞像

東京 早崎梗吉君寫真



第六十圖 門門資備中隨當備本卷終氣是發發顯明

圖書集成醫部全錄



第六十一圖 龍門賓陽中洞北面佛菩薩像

東京 早崎梗吉君寫真



原 著 畢 振 華 著 註 疏

卷六十一圖 鼎門寶圖中斷非面特書圖



第六十二圖 龍門賓陽中洞南面佛菩薩像

東京 早崎梗吉君寫真

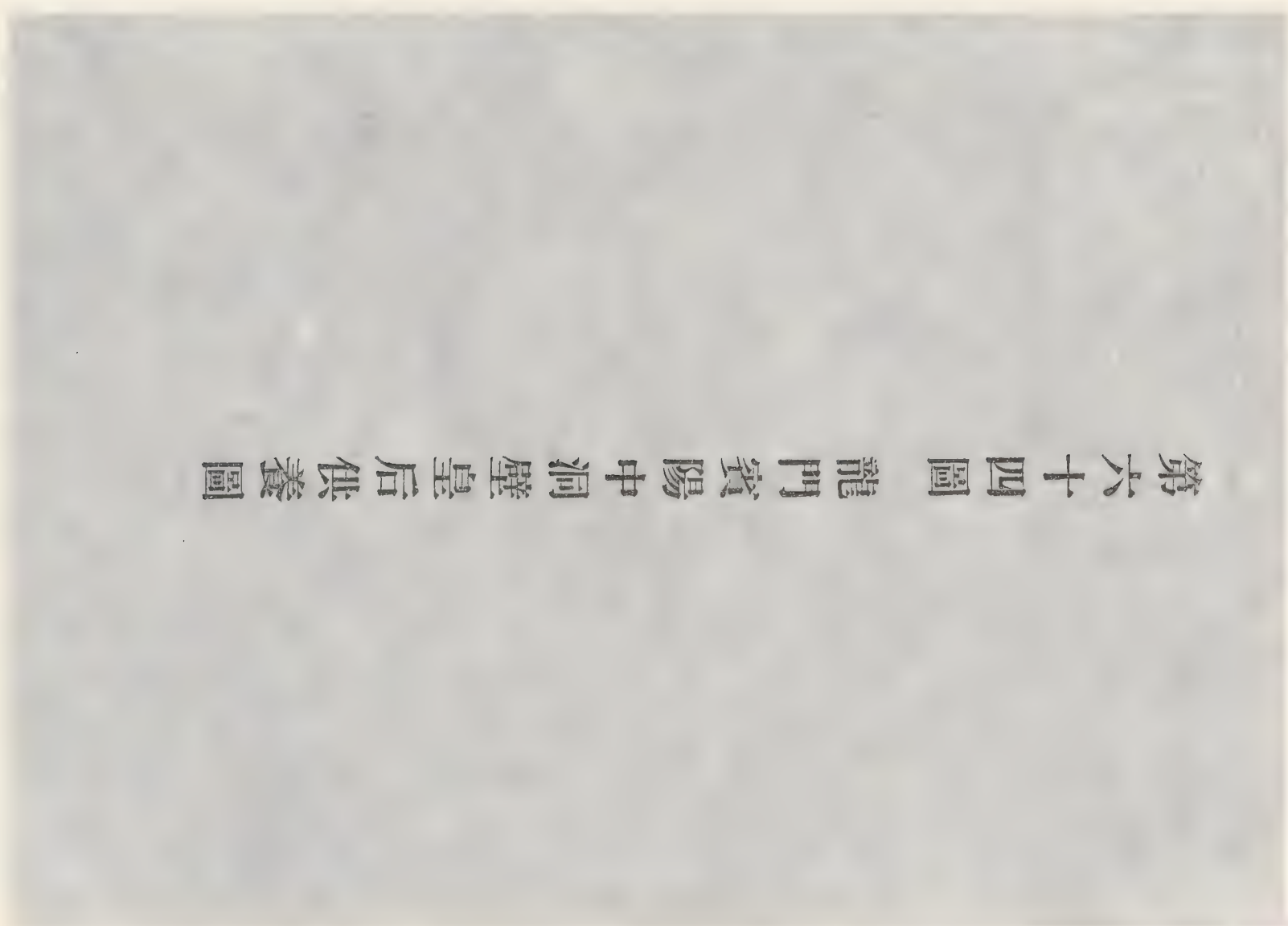


廣東省立圖書館

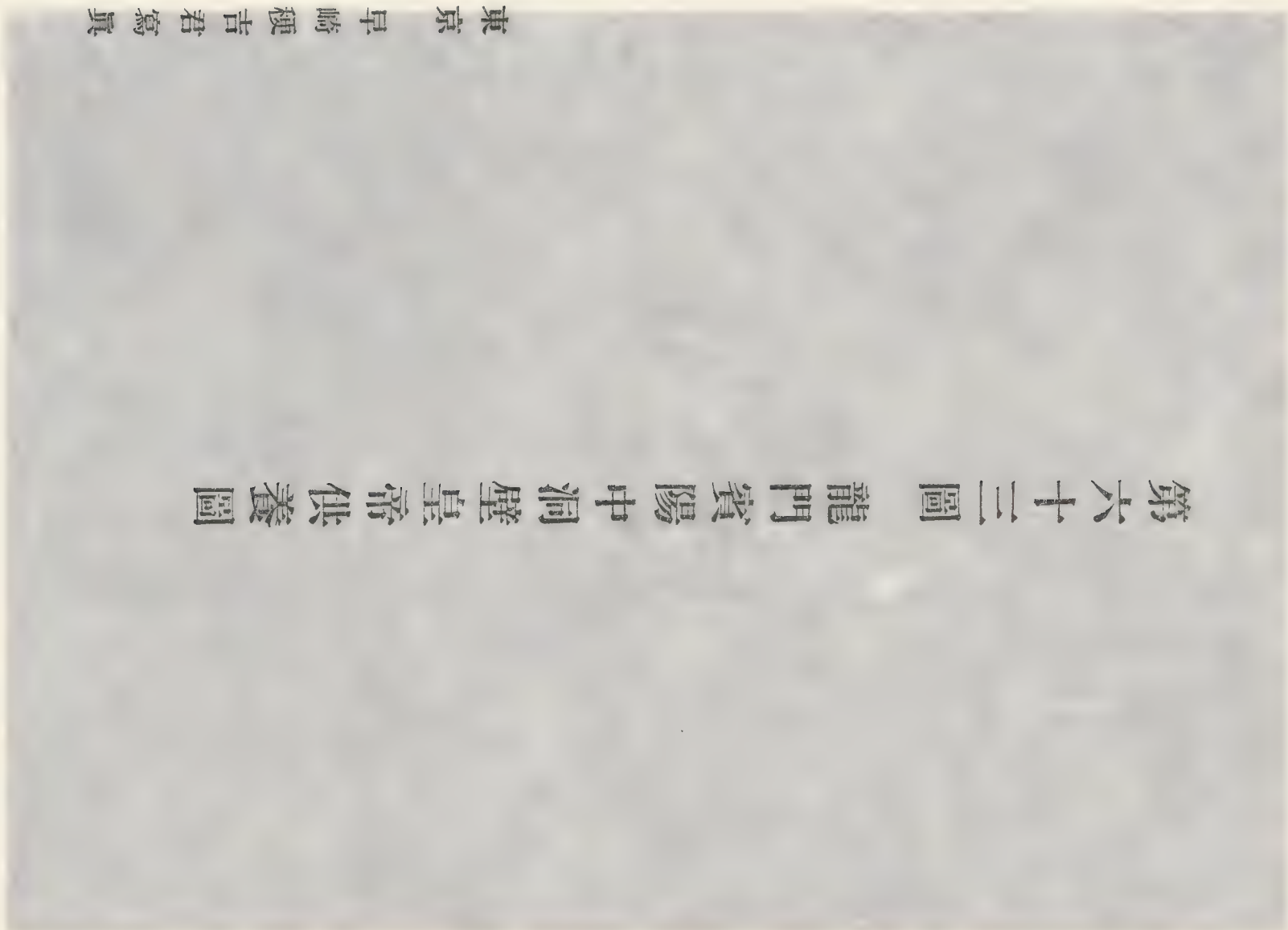
第六十二種 廈門黃埔中藥館所售藥料



第六十四圖 龍門賓陽中洞壁皇后供養圖



第六十三圖 龍門賓陽中洞壁皇帝供養圖



東京 早崎 穂吉 君 寫 眞

東京 早稲田大学蔵

第六十三圖 龍門石窟中佛龕龕蓋圖

第六十四圖 龍門石窟中佛龕龕蓋圖



第六十五圖 龍門賓陽南洞本尊佛及挾侍聲聞像

東京 早崎稷吉君寫真

卷六十五圖 廣門資嗣南補本曾附氣并符靈閣

東 京 皇 朝 御 史 司 印



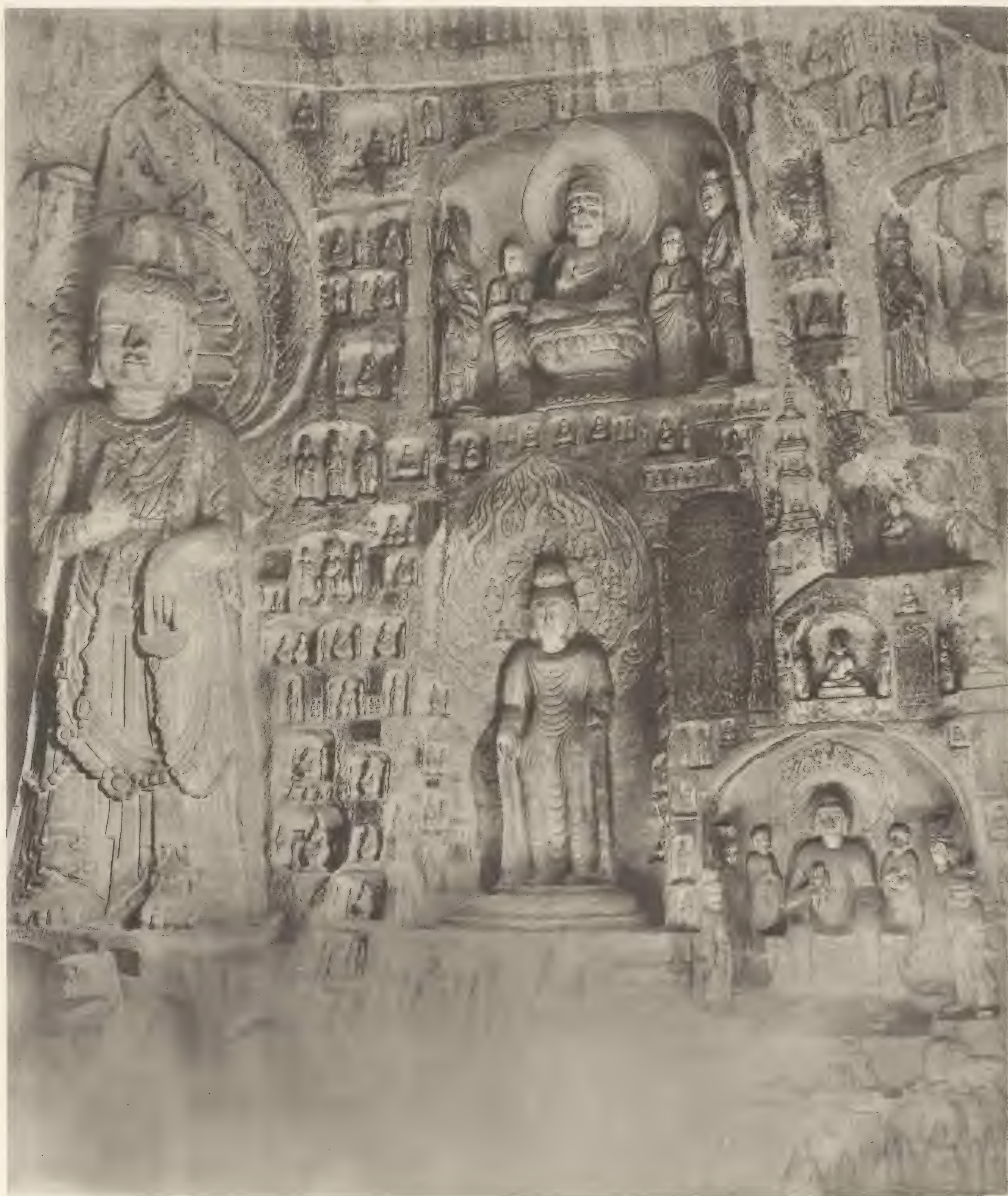
第六十六圖 龍門賓陽南洞北壁

隋大業十二年造
觀音像銘

唐貞觀廿二年
思順坊老幼等造彌勒像

此圖係在...
...
...

...



第六十七圖 龍門蓮花洞

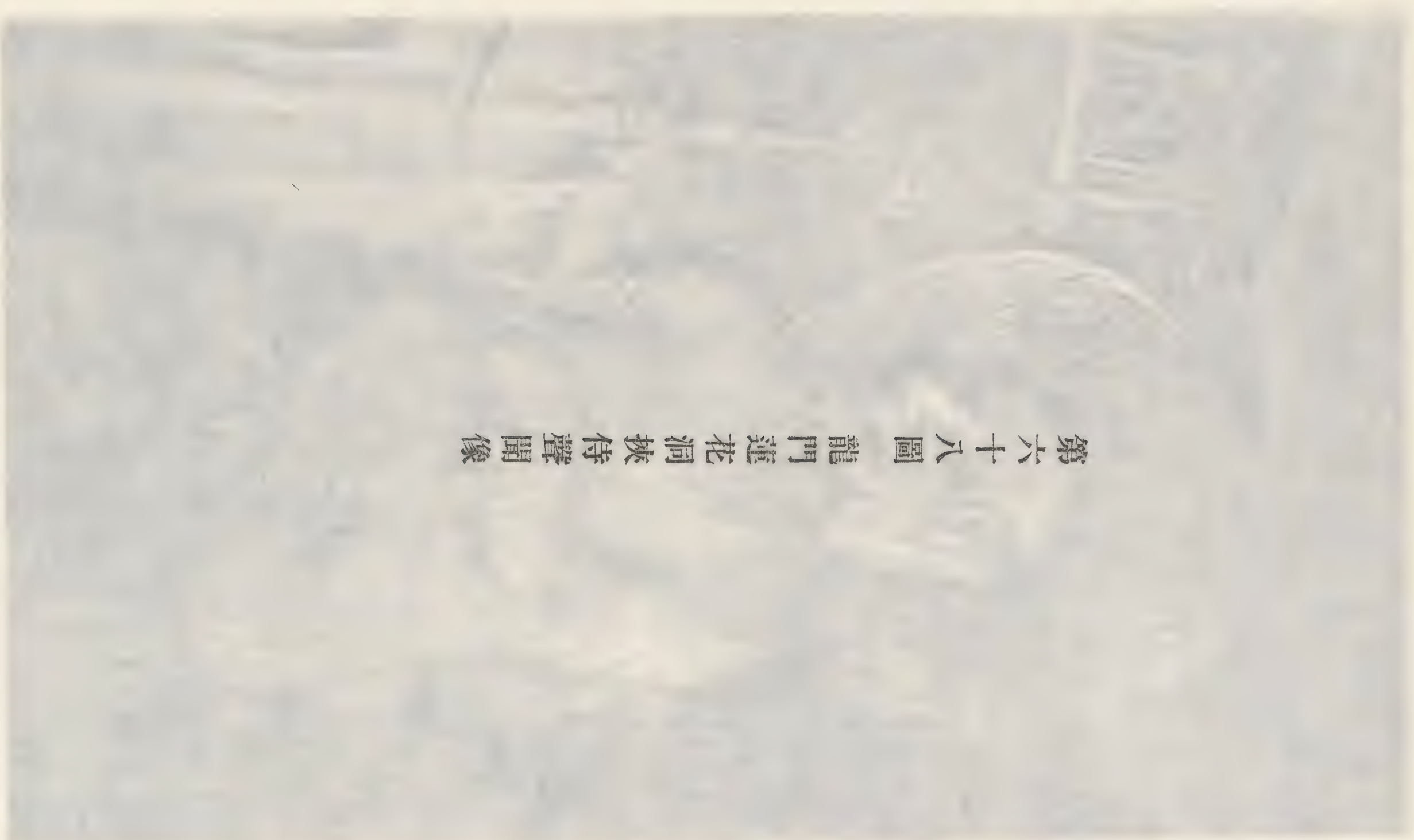
東京 早崎稷吉君寫真

第六十六卷 雜記

卷六十六 雜記



第六十八圖 龍門蓮花洞挾侍聲聞像



第六十九圖 龍門蓮花洞挾侍菩薩像



圖六十八 鼎門並茶師村骨香圖

圖六十八 鼎門並茶師村骨香圖



第七十圖 龍門蓮花洞南壁龕

東京 早崎梗吉君寫真



飛舟十圖 州門表芬屏南聖齋

東坡 早柳 鷗 吉 昔 露 興



第七十一圖 龍門蓮花洞南壁



永熙二年法儀廿餘人造像

北齊天保八年造
釋迦像

東京早稻田吉君寫真

廣州 羊城 廣州 廣州 廣州

第二章 廣州 廣州 廣州

廣州 廣州 廣州

廣州 廣州 廣州 廣州 廣州



第七十二圖 二佛並坐白玉石像

高一尺二分

東京 黑田太久馬君藏

蘇東坡先生集卷之四



第七十二圖 白玉石兩面像表面



第七十四圖 白玉石兩面像背面



東京 八 杉 直 君 藏

東 亞 大 學 叢 刊

蒙古十四圖 自正汗南面對背面

蒙古十三圖 自正汗南面對背面



第七十五圖 彌勒玉石像

凡等身

東京 早崎種吉君寫真

第七十六圖 東魏天平四年造佛石像

高一尺八寸二分

東京帝國大學文科大學標本室藏

東京帝國大學文部大學部各書庫

第三四四六二號

冊子十六冊 東國天年四半後餘存書

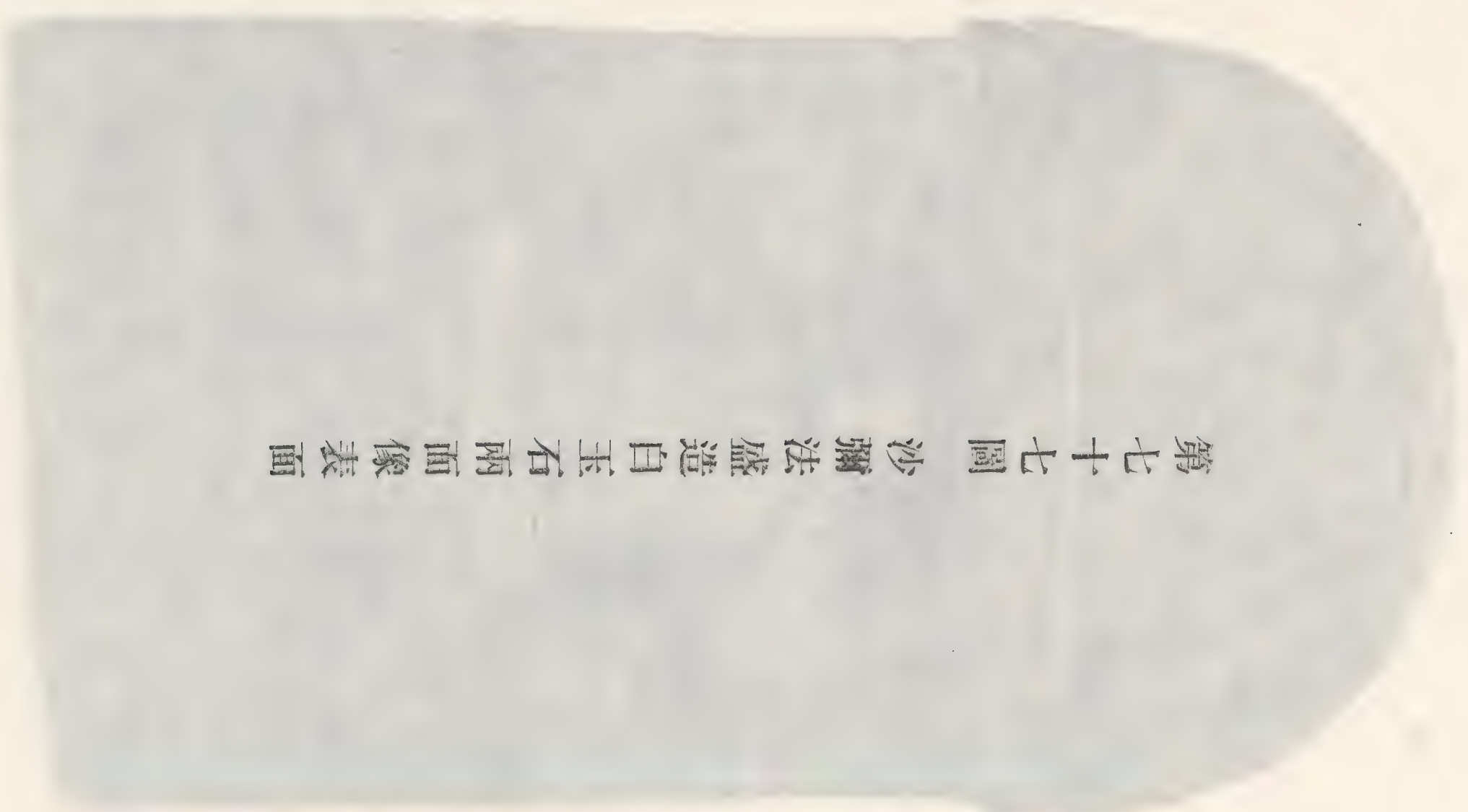
東京帝國大學文部大學部各書庫

其書目

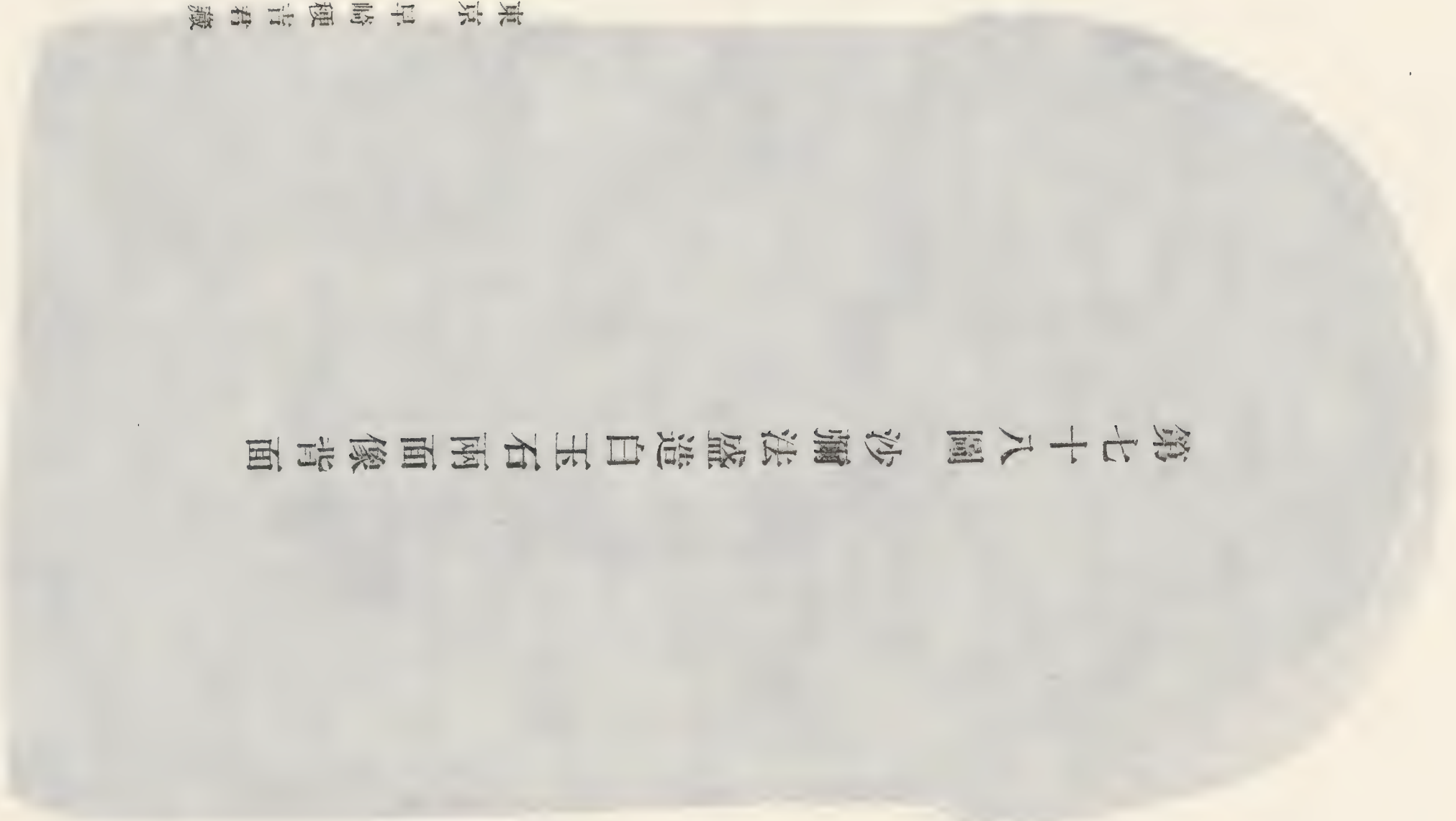
冊子十五冊 東國天年四半後餘存書



第七十七圖 沙彌法盛造白玉石兩面像表面



第七十八圖 沙彌法盛造白玉石兩面像背面



東京 早崎稷吉君藏

图五十八 中国地图

图五十九 中国地图

图六十 中国地图





第八十圖 黃玉石佛像

高一尺一寸

橫濱 原 富太郎君藏



第七十九圖 石佛像

高一尺三寸三分

東京 早崎 稗吉君藏

圖書 部 經 典 文 學 部

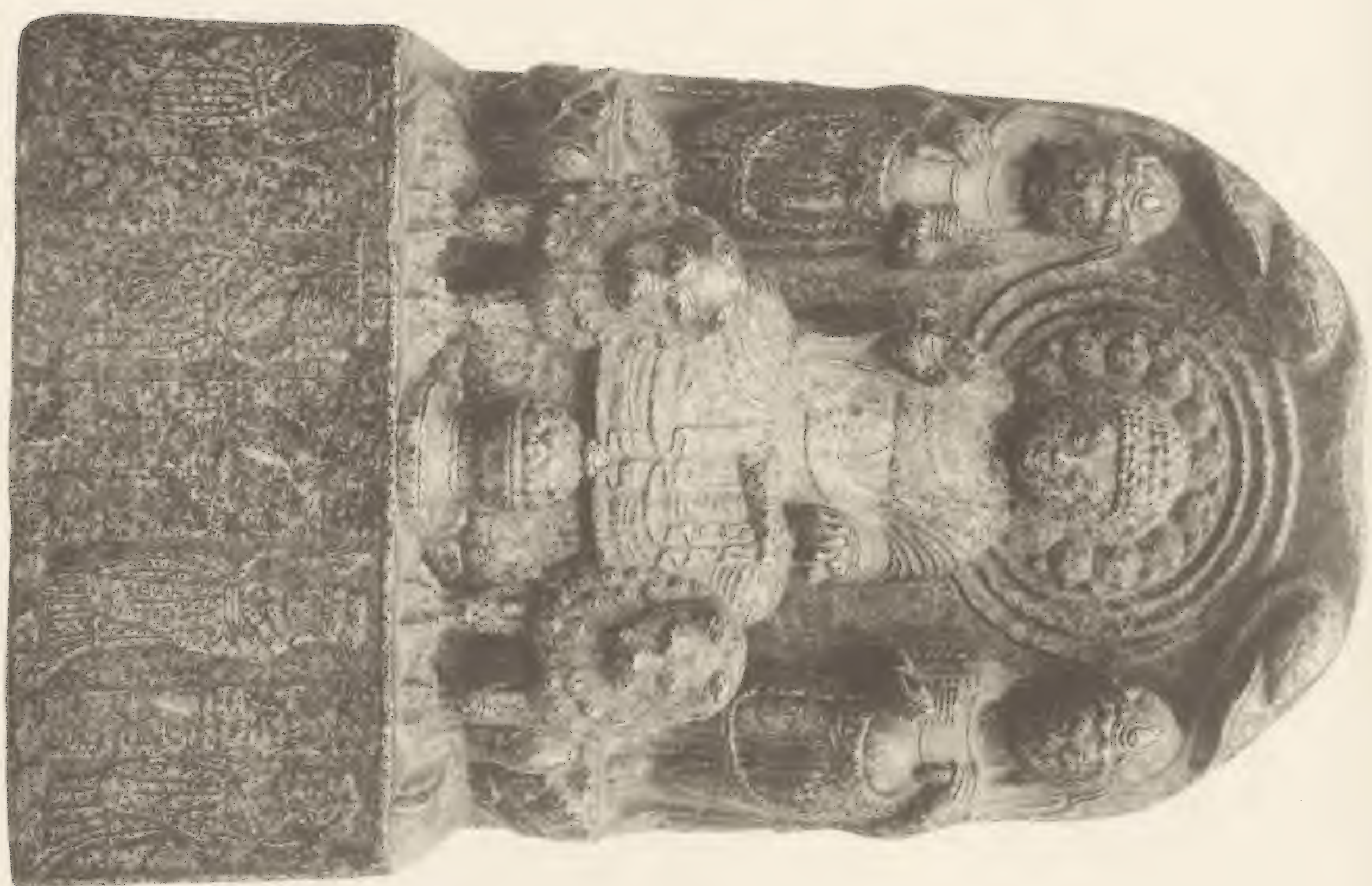
卷 一 第 一 冊

第 八 十 四 號 發 行 處 經 銷

圖書 部 經 典 文 學 部

卷 一 第 一 冊

第 八 十 四 號 發 行 處 經 銷



第八十一圖 菩薩石像

高二尺五分

東京帝室博物館藏

第八十五圖 黃玉石佛像

高一尺七寸二分

東京 早崎稷吉君藏

第一分冊

第八十五圖 真正正附

第二分冊

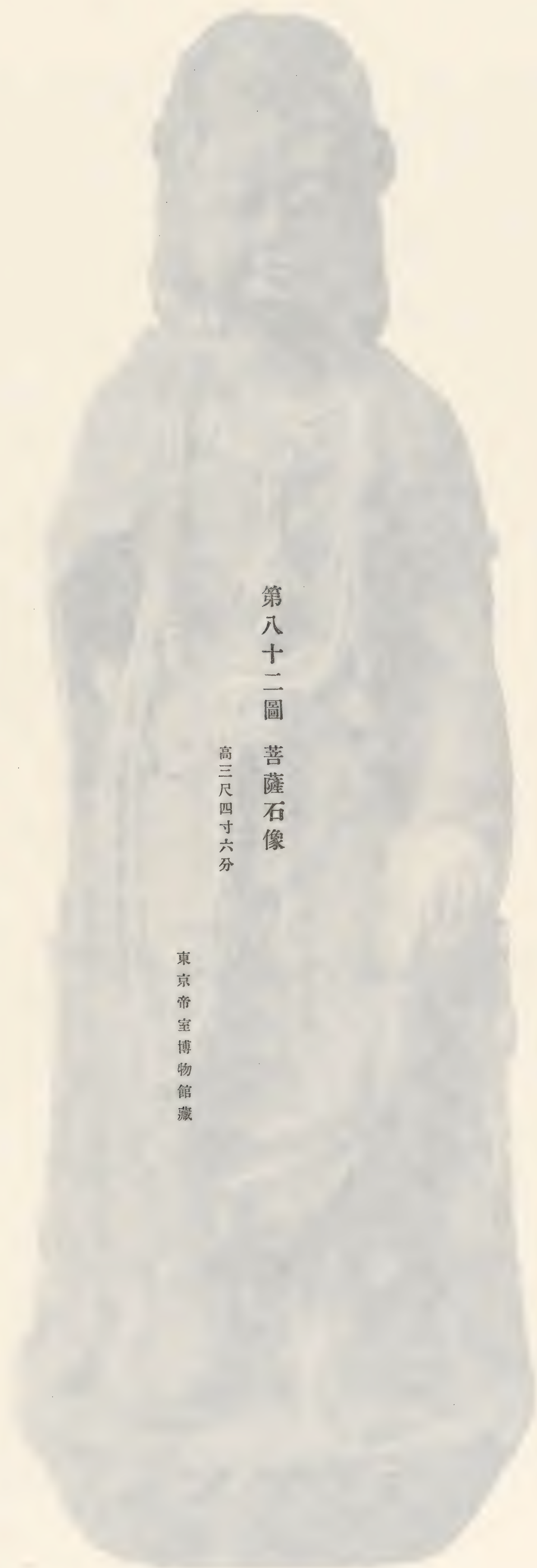
第八十一圖 活圖正附



第八十二圖 菩薩石像

高三尺四寸六分

東京帝室博物館藏



第三八回

第八十二回

金瓶梅



第八十七圖 黃玉石四面石像

高一尺八分

東京 早崎稷吉君藏

第八十三圖 彌勒白玉石像

高一尺二寸二分

東京 早崎稷吉君藏

東洋 小島國史記

卷一 八六

重八十六回 黃正還問而還

東洋 小島國史記

卷二 八七

重八十三回 嚴傳日正還



第八十四圖 黃玉石佛像

高一尺

東京 黒田太久馬君藏



積八十四圓 黃正平將繪

第三 羅拔士與謝國興



第八十六圖 三尊白玉石像

高一尺八寸

東京帝室博物館藏

第八十八圖 白玉石二綴石浮圖

高一尺四寸五分

東京帝室博物館藏

表語部言動動詞類

第一八八頁

第八十八回 自王孫二難各得聞

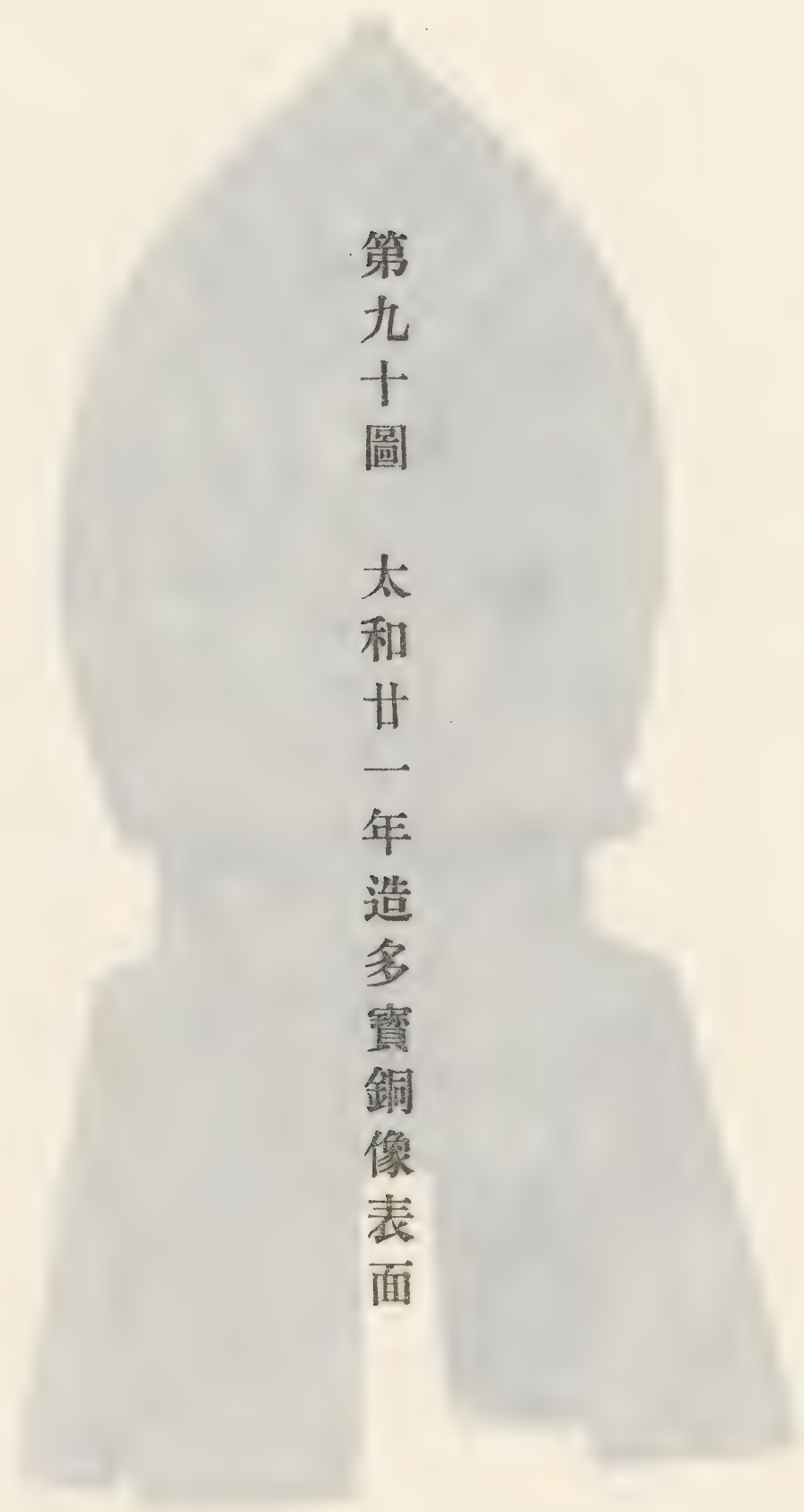
表語部言動動詞類

第一八八頁

第八十六回 三難自王孫

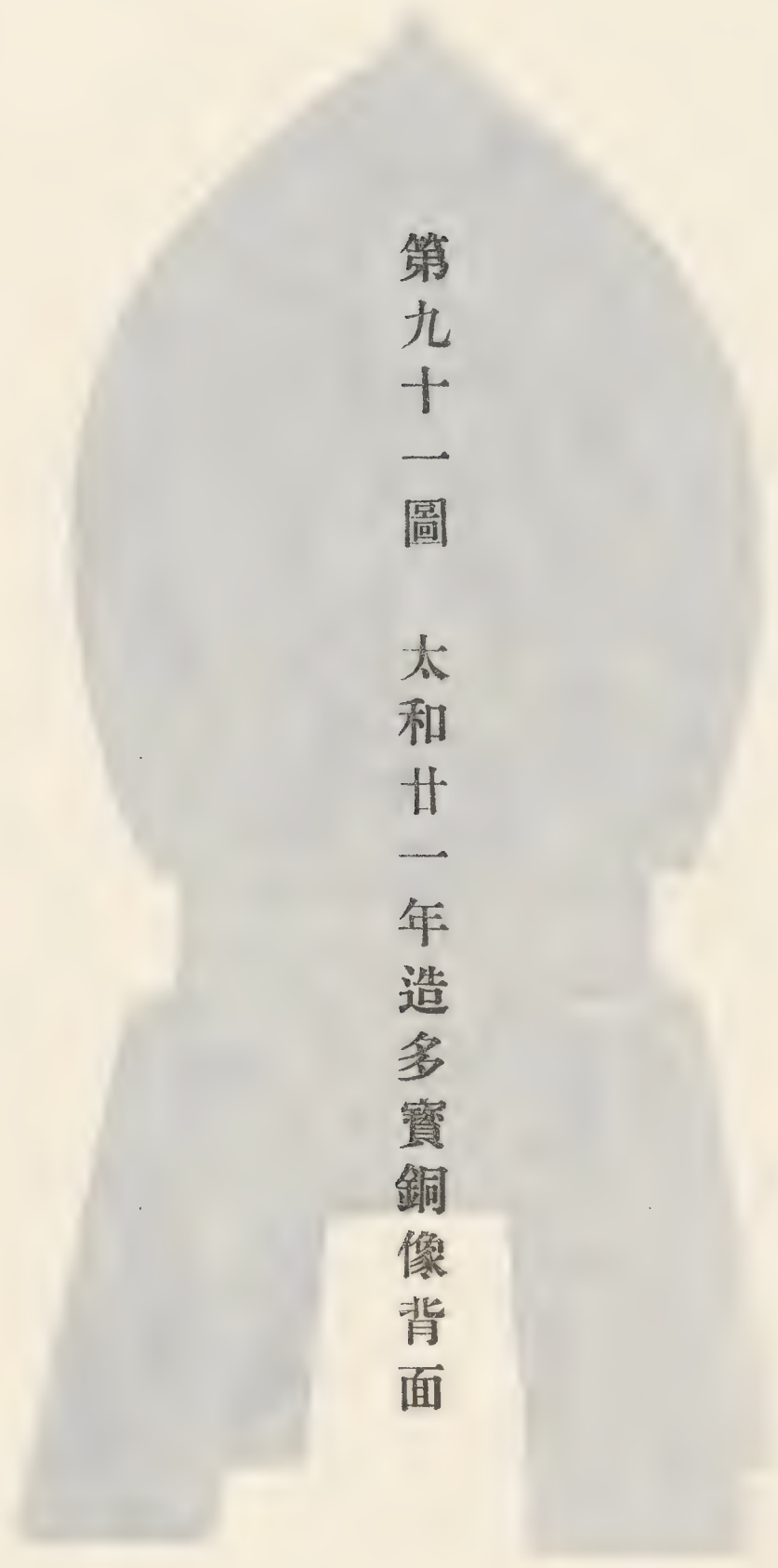


第九十圖 太和廿一年造多寶銅像表面

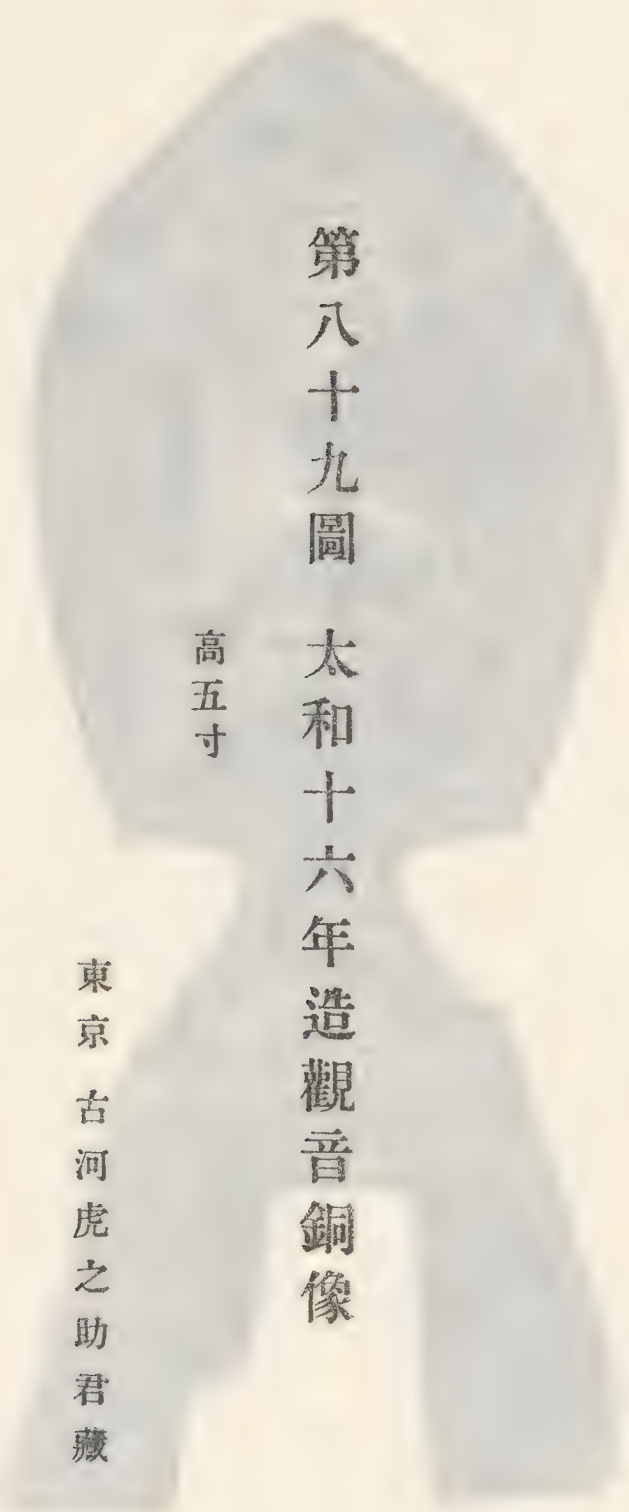


東京 古河虎之助君藏

第九十一圖 太和廿一年造多寶銅像背面



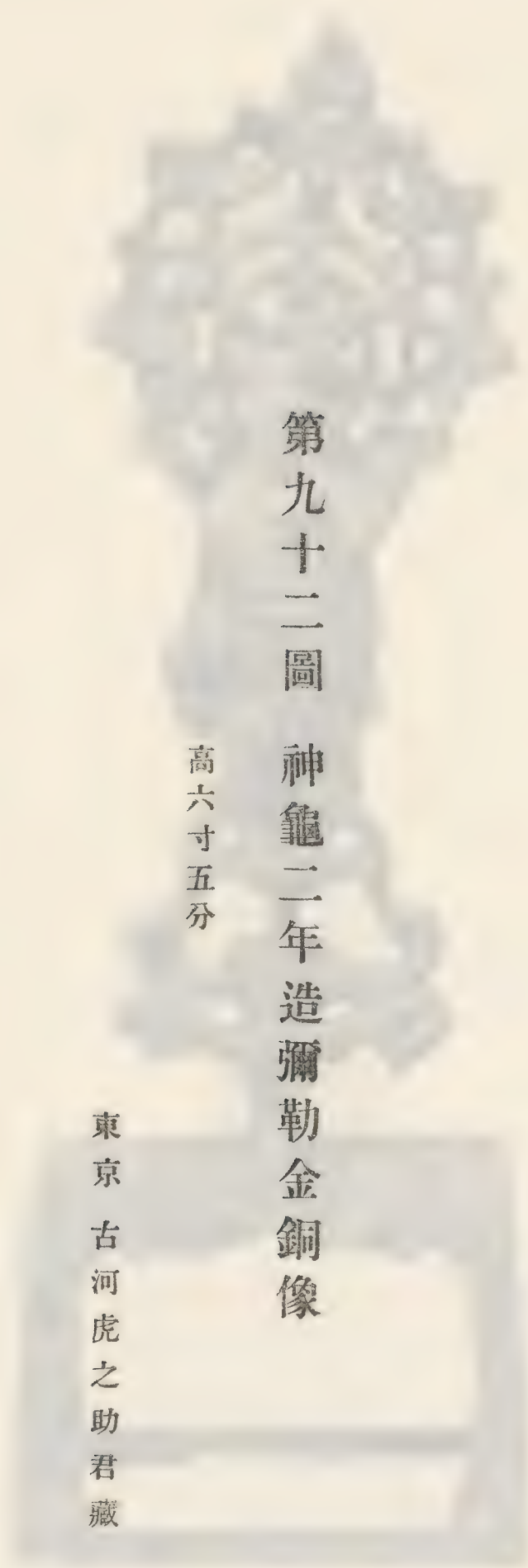
第八十九圖 太和十六年造觀音銅像



高五寸

東京 古河虎之助君藏

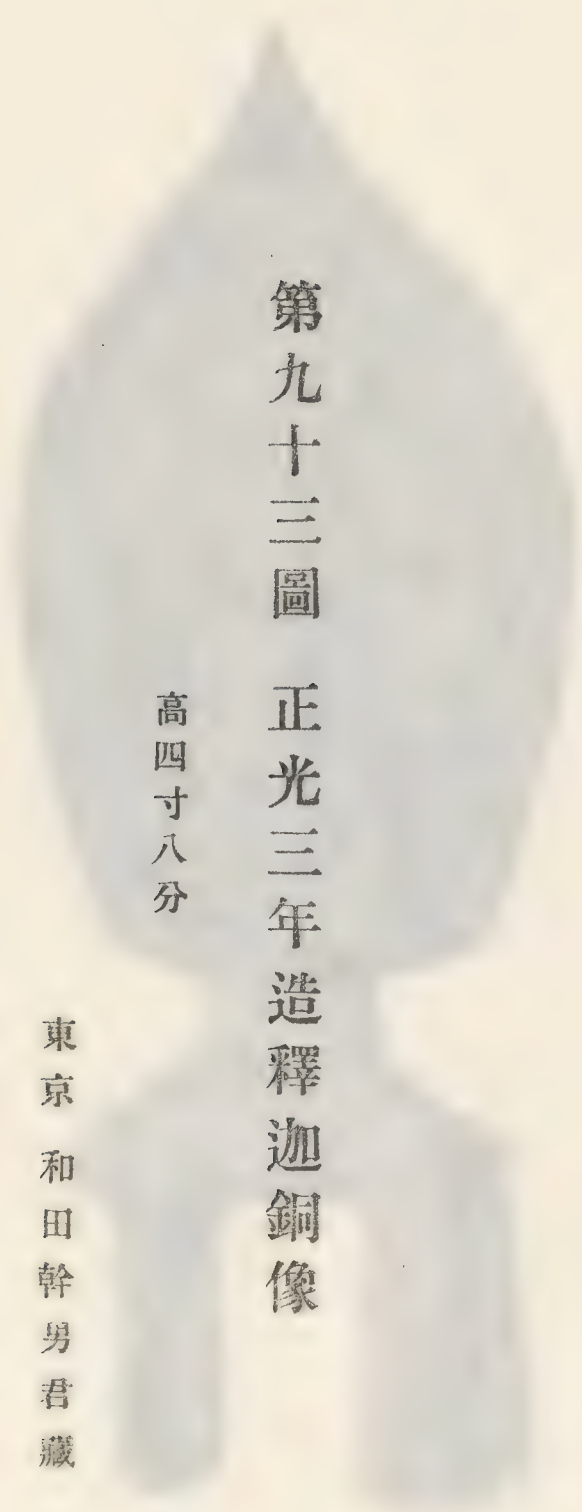
第九十二圖 神龜二年造彌勒金銅像



高六寸五分

東京 古河虎之助君藏

第九十三圖 正光三年造釋迦銅像



高四寸八分

東京 和田幹男君藏

圖式十一圖 太麻廿一半盤金寶鴨對背面

東京市所藏之銀貨

圖式十圖 太麻廿一半盤金寶鴨對背面

圖式十三圖 五光三半盤銀對背面

高四七八

東京市所藏之銀貨

高六十五

東京市所藏之銀貨

圖式十二圖 輪盤二半盤銀對金銀對

高五十七

東京市所藏之銀貨

圖式十八圖 太麻十六半盤銀對背面



第九十四圖 菩薩金銅像

東京美術學校藏



康氏十四圖 苦齋金剛經

東京美術學校藏



第九十五圖 永平年造天尊石像

高一尺七寸二分

東京 早崎稷吉君藏



卷之二

卷之二

卷之二



第九十六圖 正光二年造天尊石像

高一尺四寸

東京 黑田太久馬君藏

蘇軾詩集卷之六

五言四首

蘇軾詩集卷之六 五言二首 蘇軾詩集





第九十七圖 天尊四面像 其一

高一尺七寸六分

東京 早崎櫻吉君藏

漢書卷之六

漢書卷之六

漢書卷之六 天象四而樂



第九十八圖 天尊四面像 其二

東京 早崎稔吉君藏

加此十八圖 天象四面象 其二

集解 卷之四



第九十九圖 白鳥寺出土碑像首

東京 早崎櫻吉君寫真



張氏十代圖 白鳳寺出土物類首

東京 早稲田大學藏



附錄

龍門古陽洞造象銘二十種拓本

早崎稗吉君拓

附
錄

龍門古銅甬壺集錄二十冊

華陽野史

聖勅解城府司馬遊
道休建造
某治罪九
逆智登
地仕速日
盡春屬道
求鶴和斯
心就六建
生咸同此
和子造

維太和之十八年十二月十一日皇帝親馬
六雄第代蕭道軍國二容別於各泊行留雨音
分於開外太妃以聖善之規戒途戎移茅宇
以資孝之心戎言奉淚其曰太妃還家怙川
額母子平安造欲勒像一區以置於此言廿二
年九月廿三日法容剖就歸即造禱祠奉表忠
奉中前志永願母子長流化手眷眷何外歎
榮明一切群生咸同其福

天靈照威則弊宗庸尋容像不樂以祭之必
以真爾能大與道相攸于下床蓋于大伏茲功
炸以丘惠戶自有難立流之茲得遲寧渴誠心為
國逢石屋中東若空懸有衣來兼父健得肯兒
大失洛則割之始年六危鳥棄故巾願以權斯
匪莊在謬正父造石像一匠領亡父神乘三
周中地去照則不能行展慧鑑則大千斯體
元世師大母人道坊磨磨磨兒千若恬落
三魏例秀九雲教五門件威同斯願
太和二丁九月十四日字朱義軍書並達文

太和九年十一月使持節司空公張樂
王兵猷陵亮夫人尉遲為亡息牛欄請工
鑿石造此弥勒像一區額牛欄捨於瓜段
之鄉瞻遊无礙之境若存託生於天上
諸佛之所若生世界妙樂自在之處若有一
苦累即令解脫三塗惡道永絕因趣一切
衆生咸蒙斯福

本朝
辛巳
郎張元
祖不幸
室上妻
一帛為
遺像一
區簞令
生佛國

太和年廿張元祖妻一弗造象銘

景明三年五月
比丘
慈威為亡父
造一區願勒
像
在永隆三
寶彌顯
廣劫師僧父
母養屬與三
金永來福鍾
覽集三有群
生成同此願
比丘
造石像

色子像

寧遠將軍中散大夫
穎川太守安城侯白犢

大猷太和七年新城縣准程道起孫龍保衛伯公孫祖德衛子劉延韓買會合趙高傑官後進
功曹孫秋生新城縣准邢夏侯文德孫洪龍王洪括孫洪保王侯父及王洛州張翥董英王醜
起祖三盲人等准邢高伯生劉念祖程萬宗衛榮方樊希子王侯生和龍度還任熾諸葛銷德
敬造石像一區額國柱准邢孫鳳起夏條久成劉靈鳳楊佰醜衛天念衛靈劉韓機士費款子贊万壽
弘隆三寶券有願弟准邢王承一即毒胡孫頤孫豐書衛國標高給馬佰遣焉珍保方穆州張花
子華樂茂春龍連冠獨准邢賈道桂孫鐵敦孫道高珣國孫陽庭天保高參王天愛揚始宗高急孫榮
秀蘭撥鼓馥於昌年登准邢馮靈技李定趙龍標魏助魯伏改郭靈淵董雀王洛都董万茂李文檀
暉誕照於聖歲現世眷准邢傅之香孫狗孫龍起吳龍震吳孫方洛州尹父遠田父安宅洪秀揚方
屬萬福雲歸沐輪疊駕准邢衛方置孫天啟趙光祖姜龍起姜清韻趙契良楊榮祖趙环伍諸葛磨介
元世父母及弟子等來准邢朱法顯司馬雙張顯明倉景玠王父才陶靈玠陶晉國許靈壽王拔發使
身神騰九空迹登十地准邢董光衛信顯劉洪慶高及祖李肅子永祖憐趙醜奴王龍王雙到洛
五道群生成同此願准邢朱安武上管梨上官毛郎衛膝賈若生蘇黑奴賁龍闕賈雙王董佰壽
孟廣達文蕭顯慶書准邢朱安武上管梨上官毛郎衛膝賈若生蘇黑奴賁龍闕賈雙王董佰壽
唯那來目下集董伯初臣景明三年歲在壬午五月戊子朔廿七日造訖

色
千
像

色主仇池楊大眼為
夫靈光弗曜大千懷永夜
是以如來應群緣以顯迹
功廉作輔國將軍直閣行
開國子仇池楊大眼誕
於弱年捷超群於始嗣其
萬於一掌震英勇則九宇
於三紂掃雲勦於天路南
石窟覽先皇之明蹤觀盛
遂為孝文皇帝造石像
功示之云尔武

長歆為上父散造彌勒像一
 一軀鄭長歆為母皇甫敬造
 一軀鄭長歆為
 上兒士龍敬造彌勒像一軀
 一軀鄭南陽妾陳王女為上母
 徐敬造彌勒像一軀
 景明二年九月三日誠訖

夫靈跡誕邁又表光大之迹玄功自歟
林改昭大千懷綴暎之悲慧日潛暉含生銜道慕之應是
應真悼三乘之靡憑遂以刊像愛暨下代茲宏嚴作仁
鑲魏靈藏河東肆法給二人等永蒙光東照之資開覽
胡頭之益敢輟警衆時造石像一區凡及衆形而不備列
願乾栳輿迎萬朝皆願藏等越三槐於孤峰秀九嶷於基
范芳實再繁璫獨茂合閤榮故福深并棄命終之後飛
逢千皇神颺六通指周三達殲世所生元身眷屬捨百寶則
鴈擎龍花悟無生則靈鼎道樹互道祥生咸同斯度
陸軍縣切曹經靈藏

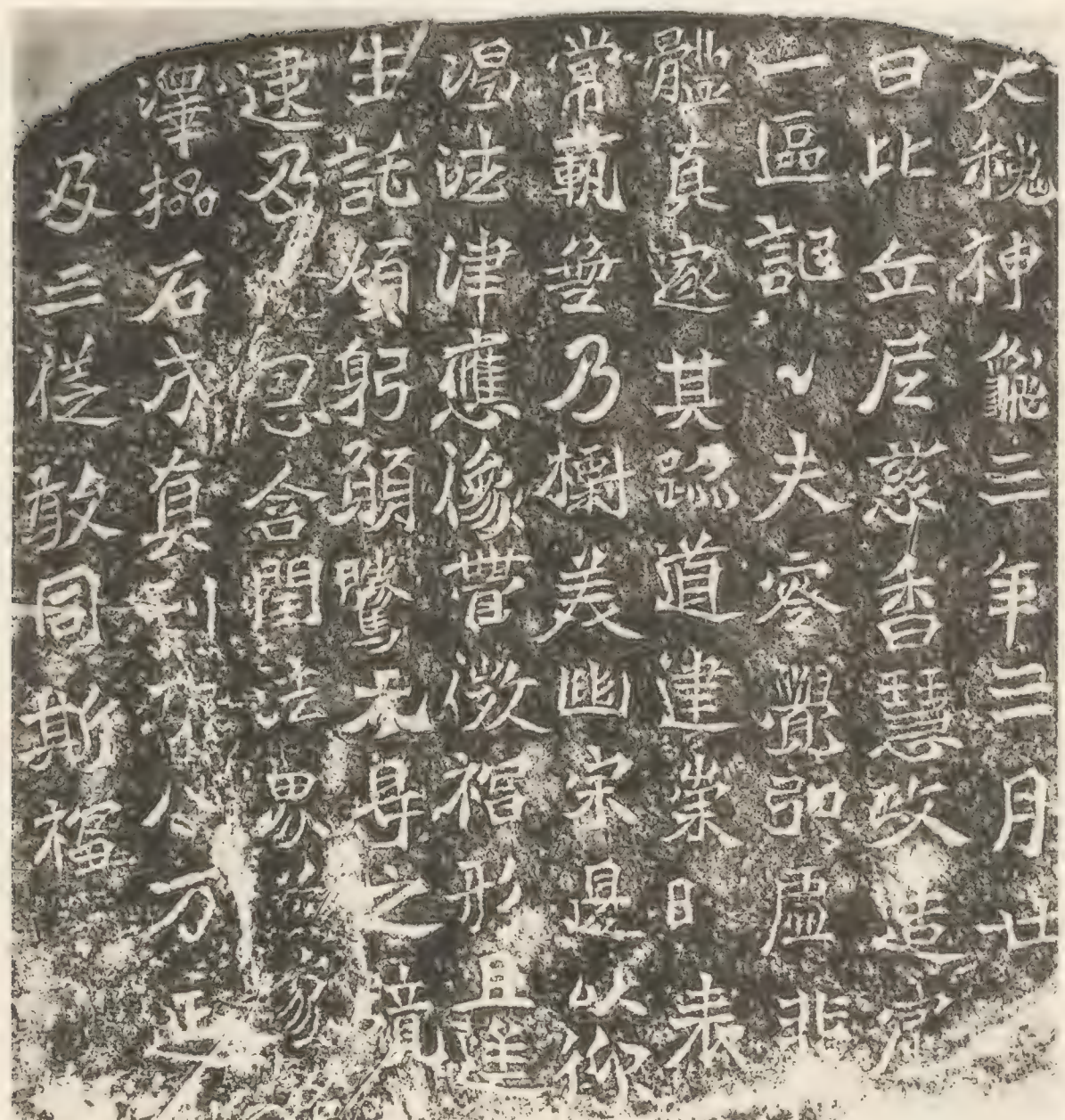
景明四年十一月
 十七日唐川王祖
 流大妃侯自以
 歷孫劼於教法
 達士雖像還奉
 紫暉早降片
 育幼後以
 蕃國冰薄之
 唯歸莫齊今
 像一區
 徵資承
 現身永康
 識展
 神顙造心
 自悟首覺遠除
 無明悲崇
 迹未空宗
 又異又集橋息
 延羊神志速
 亂嗣繁昌慶光
 弘宣妙法威愚
 于悟咸發奇提

鄉保失鄉播越
 不幸早死今為保連像仁
 區使永脫苦
 北海王國大妃高為保連

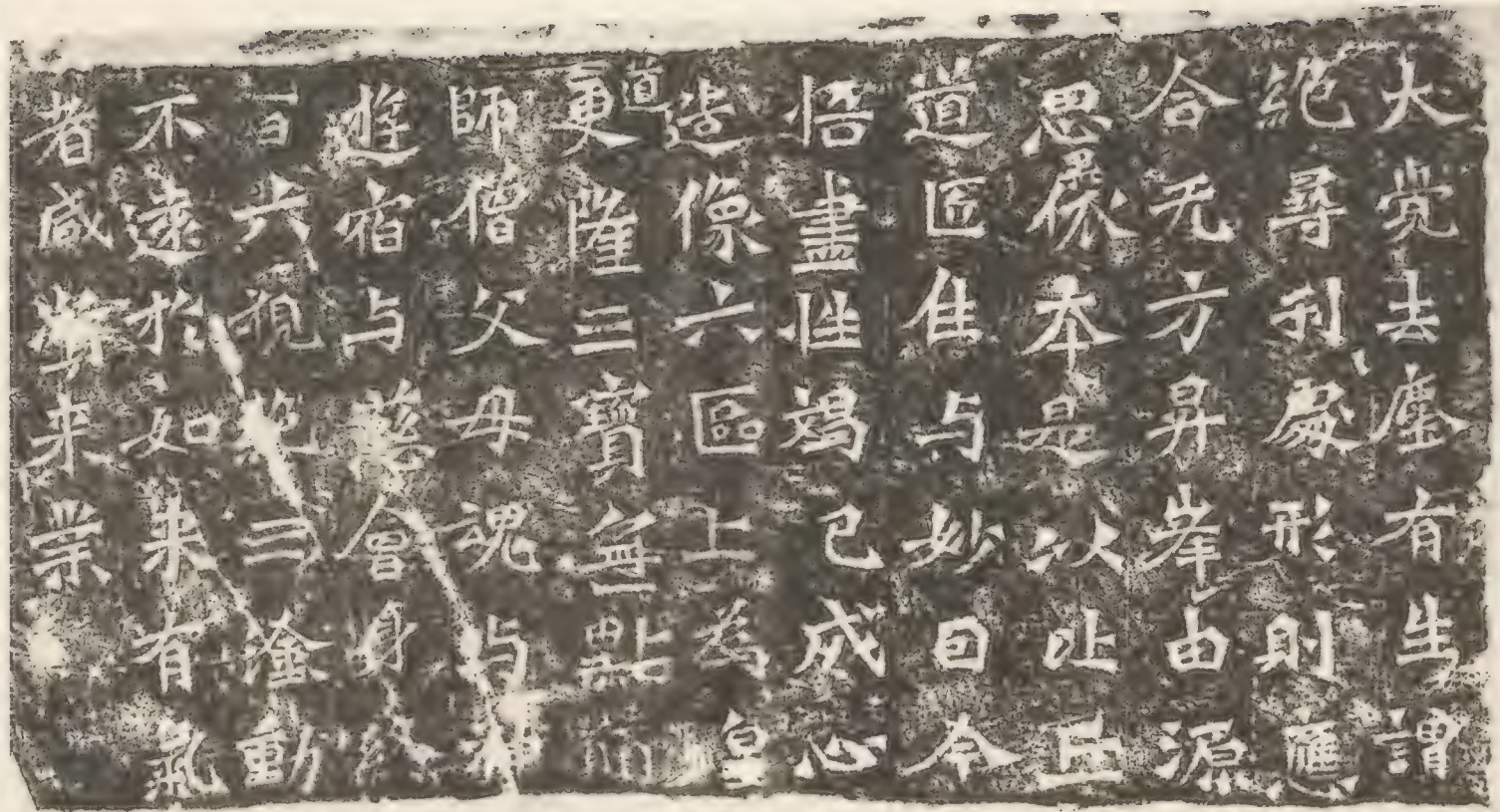
大抵音校開美恩必酬振旅休司
長短交回斯乃憫音道俗永鎮吉
今法生微蹤孝文皇帝尊上皇
寶又遇北海母子崇信於二高
演之際屢叨才選一降淨之奉元
五載思樹水司庶幾演彌今為
存文并莊海母子造像表情以申
悃遇人生捕始莊家身終風雲繡
欲歸功帝在万品衆生一切同福
景明四年三月一日比丘法
生有文皇帝并上皇王母可造

景明三辭六月十八日曾
川王祖母太妃食為忘失
侍中使持節鄧征北大將軍
廣川王賀蘭汗遣孫款輿
願令永絕苦因速成此覺

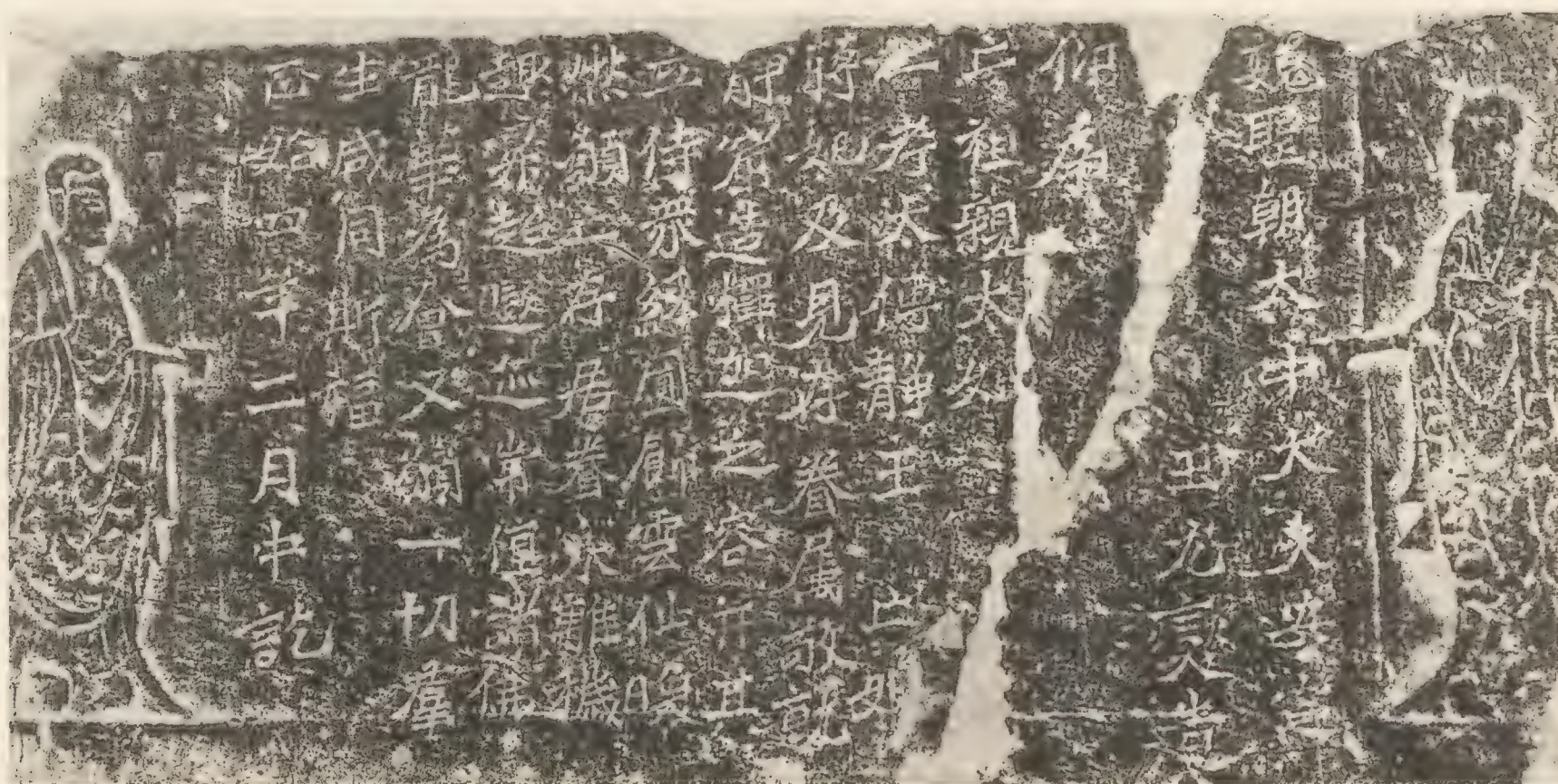
銘象造等香慈尼丘比年三龜神



銘象造匠道丘比



銘象造慶王定安年四始正



銘象造等雲曳韓唐

銘象造祐王郡齊年二平熙



大 大
正 正
四 四
年 年
八 八
月 月
五 一
日 日
發 印

行 刷

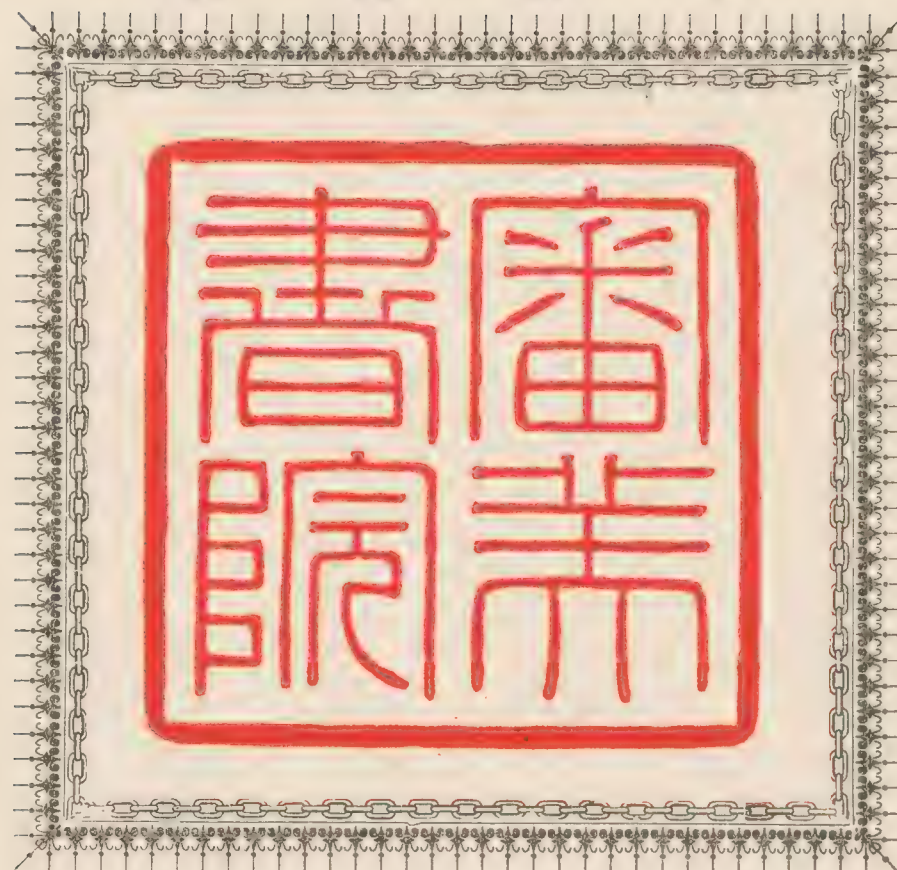
(東洋美術大觀第十三冊彫刻之部奥附)

東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社 審美書院代表者
編輯者 窪 田 勘 六

東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社 審美書院寫真版部主任
寫真版印刷者 中 山 音 次 郎

東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社 審美書院活版部主任
活版印刷者 神 山 雄 吉

不 許 複 製



印 發
刷 行
兼 所

東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社 審美書院
電話 京橋(一)三二五番

中華書局
編輯部

中華書局
審美書局
東京市京橋區神田區三十三番町

中華書局
編輯部
東京市京橋區神田區三十三番町

中華書局
編輯部
東京市京橋區神田區三十三番町

中華書局
編輯部
東京市京橋區神田區三十三番町



大正
五
四
年
八
月
一
日
印

(東京市京橋區神田區三十三番町)



Blank Page Digitally Inserted

